
俺と伝説と操る者達

週末の騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と伝説と操る者達

【Nコード】

N2520P

【作者名】

週末の騎士

【あらすじ】

普通の高校生の五徳はある日、謎の少女と共に異世界へ旅立つことになった

そこでは世界最大の企業「綾鶴グループ」と伝説の5勇者の一団が対立していた

1話 俺と海音の邂逅

「あたしは海音^{かいね}。君のことを迎えに来ました！」

「……は？」

俺は竜兔^{たつと} 五徳^{ごとく}

高校2年生の普通の16才だ

1人で帰宅中にセーラー服を着た中学生ぐらいの女の子に声をかけられた

髪はショートでサラサラ感がある

肌もきめ細やかで小柄の体型も含め、全体的に華奢だ

2次元の世界から飛び出たかのように整った顔立ちの美少女で、声は甲高いアニメ声だ

俺は今まで女の子にモテたことがないので激しく動揺している

「こことは別の世界……つまり異世界で近々大規模な戦争が起こるの。その戦争を止めるために君の力が必要なんですよ！」

海音なる少女は明るい笑顔で電波なことを言い出した

「あの、お嬢ちゃん。俺は何の変哲もないただの高校生だぜ？類は友を呼ぶ、目には目を電波には電波を、という言葉に従って、他の電波さんを探さない」

いくら可愛くても電波さんはお断りだ

俺はどちらかというとインドア派なオタクというよりは、運動好きなファッションとかに敏感なアウトドア派なんだ

……なぜか女子にはモテないけど

「むー。電波じゃないよ！予言で君が救世主になる可能性を秘めて
いるって出たんだよ！でないと誰が君みたいな冴えない不良っぽい
モブキャラに声をかけるもんか！」

「言い過ぎじゃね！？確かに冴えない顔かもしれんが、学校の成績
はいい方だぜ？」

海音はジト目で俺を見た

今気付いたが、背中にバットか竹刀的な長い棒を入れるケースを
背負っている

「むー……クラスで何番目ぐらい？」

「ビリにはなったことないぜ」

「……ふう」

俺が腰に手を当ててどや顔すると、海音は顔を背けて極めて残念
そうな表情でため息をついた

「な、何だよその顔は」

「まあ、君が馬鹿かどうかは関係な……いや、世界救うんだから関
係あるよね……。この際目を瞑って今から一緒に異世界へ行きまし
よー」

海音はやや、やる気のない声で促した

俺はこれから家に帰って友達ん家に行く約束がある

悪いが、いや何も悪くないが断らせてもらおう
けど、いくら電波といえ、こんな美少女に会えることは滅多にな
いのでもうちよつとだけ話してみるかな

「じゃあ証拠見せてくれよ。異世界なんちゃらな電波を示す証拠を」

俺が勝ち誇った顔で電波ちゃんを見下すと海音はきょとした
顎に手を当て、少し考える素振りをしてから小さな口を開いた

「証拠見せたら、あたしと一緒に行ってくれる？」

小首を傾げて聞いてきた

うつ……無茶苦茶可愛いなこんちくしょう

その仕草を無意識にやつてるとしたら将来男泣かせになりそうだ

俺は照れを隠すため、視線をさまよわせた
頬をポリポリと掻き、呂律悪く答える

「そ、それはその後考えるさ。……ど、どうせただの電波だろ」

「むむー。電波電波って人を痛い子みたいに扱って。そこまで言う
なら魔法を見せてあげる」

うわー、ゲームの中ならまだしも現実的には厨二病の極みの単語
出てきたよ

そんなものが存在したら科学はいらないっていうね

「異世界はどうしたんだよ」

「異世界は明日しか行けないから魔法でいいでしょ。それに急ぎの

用だし」

明日ねえ

俺が手持ち無沙汰に通学カバンを頭の後ろでブラブラさせていると海音は背負っていた細長いケースから……細長い小振りの刀？と木の杖を取り出した

「なんだそれ。オモチャか何か」

ひゅっ

すぱっ

俺の頭上を何かが通過したと思ったら、後ろの木が切り倒された
ちなみにここは人気のない空き地だ

木はズシンッと鈍い音をたてて倒れてしまった

切り口は真っ平らでチェーンソーを使ったのかのように綺麗だった

5

右手の刀を左から右に、俺の頭上を通過させたらしいポーズを取っている

「な……え？リーチ的に届かな……てか、全く見えな」

軽いパニックに陥って言動が定まらない

海音は右手の刀……日本刀を鞘代わりのケースにしまう

左手の杖をかかげ、めんどくさそうな調子で説明した

「ちょっと小さいけど本物の日本刀だよ。リーチや威力は射程魔法と魔力付加でカバー。このままじゃ迷惑になるから……治すね。だから横に退いてくださいな」

治す？何を？

俺はそそくさと横に移動した
すると前方に構えた杖が発光した

「対象設定完了。再生魔法発動」

機械的な口調でスラスラと唱えると倒れていた木が浮き上がり、
切り株に接着した

恐る恐る木に触れてみると何事もなかったかのように、ビクとも
しない

「ふふん。これで信じてくれるかな？少なくともあたしがただの電
波ちゃんじゃないことを」

俺は啞然と少女と木を交互に眺めた
夢でも見ているんじゃないだろうか

「何者だよお前」

「あたしは海音。国の命令で来た君のボディーガード兼、案内役兼、
訓練役かな」

これが俺と彼女の運命的かもしれない出会いだった
ぶっっちゃけ早く帰って友達ん家でゲームやりたいです

1話 俺と海音の邂逅（後書き）

こんにちは

週末の騎士です

文章表現が稚拙ですが暖かい眼差しで見守ってくださいと助かります

2話 これ、拉致ですよ

「国？」

凄く訝しげに聞いてみた

「うん。小さい頃から魔法や戦闘、勉強などあらゆる英才教育を受けてきたの。じゃ、明日よろしく」

「おい、ちょっと待てよ」

少女はそれだけ告げるとさっさと帰ってしまった
俺はしばらく突っ立ったままだった

次の日

学校へ行くため玄関から外へ出たら、海音が目の前にいた

「じゃ、行きましょー」

「え？今から学校に」

「今しかないの！次に門が開くのは一年後なんだよ！」

「俺にも心の準備が」

「だから1日時間をあげたでしょ？レッツゴー」

俺は身柄を拘束され、車に乗せられた
無茶苦茶すぎるぞおい
人権侵害というより誘拐だぞこれ

「おい、海音。今からどこに行くんだ」

「空港だよ。外国のある場所に異世界へ通じる門があるの」

「これ、誘拐つてやつじゃねえか？」

超不機嫌そうに愚痴をこぼした
服装はもちろん制服で通学カバンも持ってきてしまった
運転手が申し訳なさそうに答えた

「手荒なことをしたのは深く謝ります。しかし、海音様が仰ったように今日しかないのですよ」

「一年後じゃ駄目なのか」

「はい。今日でなければあなたが行く意味はないらしいです。家や学校には国から選ばれた特待生として海外留学へ行くと説明済みです」

あの薄情な親共め
簡単に丸め込まれるとは

「もし、帰ってきたあかつきには国から莫大な報酬と栄誉、地位が送られます」

「うーん、イマイチ実感ないな」

そこで隣に座っていた海音が運転手とボタンタッチした

「君しかいないの竜兎くん。異世界がやつらに掌握されればこの世界にも危機が迫るんだよ」

「やつらって？」

「綾鶴グループ。あやづる異世界の世界最大の財閥だよ。そこが世界を牛耳ろうとしてるの」

綾鶴ね

異世界でも漢字とかあるのかな？

「言語系の魔術を駆使するから言葉は通じるよ」

「便利だな魔法」

外の景色を見ると田舎風景から都会の景色に変わっていた

「それで、綾鶴グループと敵対する最大のグループが伝説の5勇者。あたし達の味方ね」

「伝説？」

「うん。歴史にも残る最強クラスの实力を持つ人たち。何度も世界を救ったことがあるの」

なんでもその勇者たちは何百年も生きているらしい
そして今回はその5勇者たちでも厳しい戦いになるそうだ

全く、なんで足が少々早い程度の凡人がこんな目に……

と、表面上は文句を垂れていたが本当はワクワクしていた
退屈な日常から抜け出し、非日常な日々を送る

誰しも一度は願うことだ

それが現実に取りこり、しかも終わった後は莫大な富と地位を得られる

普通の人は身に危険が迫ることは嫌がるが、俺は違った
おそらくこれが俺の唯一異常な点だろう

今、俺はどこかの国の神殿の中にいる

「ここを潜ると異世界に繋がっているよ。覚悟はできた？」

「覚悟も何も無理やり拉致ってきたんじゃないか」

目の前には大きな古めかしい門

その扉が開き、真つ暗な空間が目飛び込んできた

「なんかどす黒いな。ところで俺とお前以外はついて行かないのか」

「うん。ある事情であたしと君しか行けないの。向こうに着いたら
事前に連絡しておいた向こうの協力者と落ち合うのが最初の目的だ
ね」

そして、俺と海音は門を潜った

2話 これ、拉致ですよね（後書き）

ギャグ少なくてごめんなさい（^| ^ ;）
次回はギャグ入れると思います

3話 私の屍を……

「ここが異世界か」

門を潜ると辺りは草原が広がっていた

「ここはかなり郊外のところだよ。異世界特有の地とかもあるけど元の世界と似てる場所もたくさんあるんだって」

「だってってなんだよおい」

海音はにまーつと笑って答えた
今更だがなんでセーラー服着てるんだこいつ

「あたしも初めてきたから」

「そんなんで大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。地図とか持ってるし。どうやら世界を救う旅には同意してくれたんだね五徳くん」

うつ、名前で呼ばれた

同意というか流されたというか、とにかく悪い気はしない

「まあ……な。ところでお前のフルネーム教えてくれないか？海音って下の名前だろ？」

「なんで？」

「いや、なんつーか、ああもついいや。行こうぜ海音」

どうにも下の名前で呼び合うのは気恥ずかしい

……俺ってウブだったんだな

「どうした？立ち止まって」

海音はもじもじしている

いつもこういう年相応な可愛らしい態度でいればいいのに
そして、照れくさそうに語った

「実は、当初予定していた場所より大分離れたところに出てきちゃ
ったんだー」

てへへっ、と困った仕草をする

は？

「ここら辺は郊外だからそんなに治安よくないかも」

「じゃあこれからどうすんだよ」

「とりあえず近くの町に」

「ぐわあー！」

どこかから男の悲鳴が聞こえてきた

「おい、これって」

「うん。誰かが襲われてるっぽいね。助けに行こう」

「え？マジっすか。俺、戦えないって足速！」

なんとか追いつくと手に剣を持っていた男がマント、シルクハット、ステッキ、仮面を身にまとった男をいたぶっていた
うわあ……なんだあのコスプレ男

「ぐふっ、君たち！私はマントマン。助けてくれえ」

「そうはいかないぞ。お前を殺せって依頼されてるからな」

男がマントマンに切りかかった

キーン

「ああ？誰だてめえ」

「あたしは通りすがりの正義の味方だよ」

「嬢ちゃんよく見ると可愛いな。へへへっ」

今どきあんな人間がいるのか
へへへって笑ったよへへへって

「俺はCランクの暗殺者。命乞いするなら見逃してやるぜ？」

「Cか。ふーん、そこそこだね」

海音と男は剣を打ち鳴らしあっている

「おらよ。光魔法だ」

男の剣が光り、凄まじい速さで剣を振るった
海音の体に直撃し、小さな体が後ろへ飛んだ
ザガンッ！と碎けるような音と共に彼女の周りの岩や地面に亀裂
が走った

「なっ、大丈夫か海音」

「大丈夫ですよーバリアで防いだから。あたしも少し力を出します
かね」

「ふん、あれを食らって平気か。ただの子供じゃねえな」

男と海音が再び剣を交じらせた

「相棒、そのマントとガキを任せた」

「へいへーい」

木の陰からごつい男が現れた
嘘だろ

「少年！私をおぶって逃げてくれ」

「え、俺！？くそっ」

俺はマントマンをおぶって走り出した

もう一人のごつい相棒（以下ごつ相）が追いかけてきた

「あんだ意外と軽いな……って追いつかれる！」

「ひー！お助けー」

ごつ相は手に持っている……ごつい棍棒を後ろからマントマン目掛けて振り下ろしてきた

「「うわああああ」」

ふっと、視界が反転した

どうやら崖から足を踏み外したようだ

そのおかげで棍棒を避けたが

俺たちは落下した

-
-
-

「ぜっはあ、この！」

海音は男の剣を軽々と避け、腹に蹴りを入れる

「があっ」

「ま、こってこんなものだよね」

辺りは切り傷が広がり、凍りついていた

「俺の魔法が全部凍らされて……てめえ、一体」

「残念でした。あたし、Bランクなんですよ。それに、別に氷系が得意ってわけじゃないし」

「ぐっ、おああ！」

男は剣に巨大な光を纏わせた
そのまま海音に切りかかったが

「そろそろ飽きたから終わらせるね」

剣を振り下ろし、地面を引き裂いた
爆音が轟き、地面が抉れた

「そんなの当たらなければ意味ないよー」

「ぎゃ」

日本刀の柄で後頭部を叩き、男を気絶させた

「攻撃に力を使いすぎて防御が手薄すぎ。CランクじゃなくてDくらいじゃないかな」

海音は刀をケースにしまい、男の額に手をかざした

「とりあえず記憶を消させてもらっね」

- - -

崖の下は木が生い茂り、たくさんの枝をクッションにして落下した
運良く池に落ちて奇跡的に助かった

「初っぱなからひどい目にあった」

とりあえず嘆いた

海音よ……俺のボディガードじゃなかったのか
情けない話だが

「少年、まずは自己紹介から始めようじゃないか」

「そんな悠長な。しばらくしたらあのごつ男が降りてくるぜ？」

「まあまあ。自己紹介ぐらいいいだろう」

渋々承諾した

「俺は竜兎 五徳だ」

「私はマントマン。下から読んだらンマトンマ」

はい？

「あれ、これじゃあ回文にならないじゃないか！」

知らんがな

「マントンマ……よし、これにしよう。私の名前はマントンマだ！」

「ムンムン」

「私はマントマンだ！なんだそのマヌケな名前は！人を馬鹿にするのか」

「ええええええええええ、えええー」

理不尽なキレ方をされたよ

「おっ、ここにいたのか。抹殺抹殺」

ごつ相がのそつと現れた

「あんたが怒鳴るから見つかっただろうが！」

「人のせいにするのいくない！私、逃げる。全力だーあっしゅ」

なんだあいつ、速っ！

さっきまで瀕死だったよな！？

「ちよ、俺も逃げる！」

「あ、待てこら」

俺は昔から逃げ足が速く、脱兎の五徳とあだ名がついたほどだ

つまり、ヘタレです

「くそー、助けてくれ海音ー！」

「情けないなあ少年！」

「あんたに言われたくねえ！」

幸いごつ相は重そうな棍棒を持ってるため、足はそんなに速くない

「ぐっ、もう駄目だ」

マントマンが力尽きた

「やっぱり相当なダメージじゃねえか！」

「少年……後ろから敵が迫ってる。私の屍を背負って逃げてくれ」

「そこは屍を踏み越えてじゃないの！？」

ぐうっ、置いていくのも気が引けるし、かといって背負って走ったらすぐに追いつかれるだろう

異世界に来ていきなりの大ピンチだった

3話 私の屍を……（後書き）

長くなってしまいました
分けたほうがよかったかも……（ - . - ; ）

4話 2人の勇者

「ふーん、やっぱりこの男、綾鶴の」

海音は男の記憶を覗いていた

「ただ、あのマントが何者かは分からないか。って、あ。五徳くんたちどこ行っただろう？探しに行かなくちゃ」

- - -

どうする、どうすんだよ俺！

「ああ、もうすぐそこに足音が」

俺は立てないマントマンを抱き起こそうとしたがなかなか持ち上がらない

お互い、服がびしょ濡れのため体が重い

「こうなったら、やるしかないか - -」

「マント野郎みつけ。あのガキは逃げたか。まあ、ターゲットはこいつだけだし別にいいだろう」

「ごつ相が一步踏み出したその時

「食らえ！」

俺は木の上から小ぶりの岩を落とした

ごつ相がやってくる直前、岩を抱えて木に上った

岩を抱えて少し手こずったが、上りやすい木で助かった

「ふん」

ぱしっ

「げっ」

ごつ相は岩を空いてる手で軽々キャッチした

「それ」

岩を俺のところに投げ返してきた

ガッツと音がして、乗っかっている木の枝に当たった

俺は態勢が崩れ、地面に落ちた

「いでっ！」

「よお、ガキ。無駄な足掻きを。そのマントを見捨てて逃げればいいものを」

ごつ相は俺の下により、棍棒を思い切り振り上げた

「あああ」

足に力を入れ、ごつ相の懷に潜り込んだ
そのまま足を持ち上げるようにして、タックルをかます

「無駄無駄」

軽々と腹を蹴り飛ばされた
木に衝突し、肺から息が漏れる
バサバサと埃や葉っぱが降ってきた

「がっ、ゲホケボ。くっそ……」

なんて非力なんだろう
こんな役立たずが救世主とか笑い話もいいところだ

「終わりだガキ」

今度こそやられる

「待てい！」

マントマンが這いつくばりながらごつ相の足を掴んでいた

「その少年は何もしていない。ターゲットはこの私、マントンマだ
けだろう？」

さっきは否定したくせにマントンマまた言いやがったよ
かっこいいシーンが台無しだ

「ふん。分かった」

この時、俺は自分の身の安全を確保できたと思い、ホッとしてしまった

最低だ、俺

「お前を殺したうえで、あのガキを殺そう」

ごつ相はギイと歪な笑みを浮かべる

「ふむ……全くもってジェントルマンじゃないね君。罪のない少年に手を出すとは」

「先に手を出したのはそっちだろ。そのガキの仲間が俺の相方にな」
無情にも棍棒は振り下ろされた

「やめろ……！」

ぐるん

俺もごつ相もマントマンも何が起こったか分からなかった
ただ、ごつ相の体が態勢をそのままに、回るように地面に転んだ

「……？、？」

3人が3人とも困惑する中、一人の青年が木の茂みから現れた

「これから子善しぜんとの決戦だっというのに、人助けとは」

見た目はスーツとネクタイがよく似合う優男だ

「誰だてめえは」

ごつ相が棍棒で青年に殴りかかった

「やれやれ。人の名前を聞く時は危害を加えないのが常識だよ」

青年が右手を前に突き出した

それだけでごつ相に見えない力が上から降り注ぎ、地面に突っ伏した

「かつ、あ……」

「あつ、五徳くんたち見つけた！……誰？この人」

海音がようやく到着した

まあ、これでも早いほうなんだろうが

「今から数時間後にこの地域で大規模な戦いが起こる。君たちは逃げな」

「大規模な戦い？あんた、それに関係すんのか」

俺は痛む腹を抑えながらマントマンに肩を貸す

「まあね。それよりゴールド。こんな雑魚にボコられるなよ。僕や他のみんなの立場がなくなるだろ」

マントマンはハハハと乾いた笑みを浮かべ、言い訳をするように
呟いた

「いやー、ゴールドだったのは昔のことだよ。今はただのマントマン
さ」

「ゴールド……マントの人、あなたもしかして」

海音が何かを思い出したようだ

「ああ。その青年と共に、かつて5勇者と呼ばれていた者だよ。
今はインドア派のしがない紳士だがね」

5勇者ってさっき聞いたあの？

この青年もってことはいきなり2人に会えたのか

「ま、つまりそのマントは死んだ伝説ってことだよ。僕や他のみ
んなは生きた伝説だけだね」

「はは、まいっちゃうねー。まだ怒ってるのかい？」

この2人、何か因縁があるらしい
青年のマントマンに対する態度が冷たいな

「ふん……。とにかく君たちはそのマントと一緒に離れるんだ」

「さつき子善と言っていましたよね。つまり、日程が大分早まったん
ですね」

「子善？」

俺だけハブにされてちょっと悲しいぞおい

「ああ。今から子善と僕……つまり、綾鶴グループ最高幹部の綾鶴子善と伝説の勇者との戦争が始まるんだよ」

俺は数時間後、この世のものとは思えない、まさしく「人災」を目の当たりにした

4話 2人の勇者（後書き）

予約掲載したつもりが間違えて即掲載に：

中途半端なまま投稿してしまいましたorz

次回からは気をつけます

5話 くり押し

「お兄さん、今日は戦況を大きく揺るがす大事な戦いなのでくれぐれも負けないでくださいね」

俺は綾鶴 子善

年はまだ大学生ぐらいだが、綾鶴グループの戦闘要因最高幹部にして社内でも高い地位にいる
昔から帝王学やら何やらを叩き込まれたからなあ鬼のように

「大丈夫だつて。お前がついてくれば勇者の一人くらい楽勝なんだがな」

とにかく今回地の利は俺にある

周りは自然が広がっているため、戦いやすい

「ふふふ。私には他に用事があること、知ってますでしょう」

目の前にいるのは同じく最高幹部の妹だ

年は高校生ぐらい

綾鶴グループの最高幹部は全員綾鶴家の者だ

父、俺、妹、そして中学生の妹

父の血を直接ひく者は他にもいるがまだ幼いため、幹部にはなれない

「さあて、そろそろショーの始まりだな」

俺はヘリコプターの中で迫る決戦に胸を高鳴らせた
力を自由に使えるのはこういつ時ぐらいだからな

- - -

「この戦いはある利権を巡る重要なものだ」

俺、竜兎 五徳は近くの山の山頂で勇者の一人の青年の話を聞いていた

青年の名前はP・Qと言っらしい
なんかの頭文字か？

「ここなら安全なのか？PQさん」

PQに尋ねる

「ああ。ここなら被害にあつことはない。それに、君が予言の救世主というなら頂上の戦いを見ておきたいだろ？」

この山頂は見晴らしがよく、絶景だ

異世界に来ていきなり凄まじい戦いが見れるなんてラッキーなんだかアンラッキーなんだか

俺たちは今、昼食を食べていた

「そうですねい。あつ、パフェもつとくださいな」

海音はさつきからずっとパフェを食べている
それで5杯目だぞおい

つか、なんでパフェ用意してあるんだ？って質問したら駄目なのかな

海音は幸せな顔でいろんな種類のパフェを食べ比べる

……太るぞ

「むー、太ってないもん。あたし太らない体質なんだよ！」

チョップされた

痛いでごわす

心の中読まれた！？

「ハハハ、乙女心は複雑だからね」

マントマンはシルクハットの中から栄養食品やら携帯食糧やらを取り出して食事していた

どうなってるんだそのシルクハット

「ふむ。やはり牛丼は至高にして最高の料理だ」

PQは大量の牛丼を食している

どれだけ牛丼好きなんだ

てか、この世界には大食漢多いなほんと

「むむむー、あたしは男じゃないれふ」

さっきから心の中読み過ぎだろお前

マジこええよ

「なるべく早く終わらせてくれよPQ。帰ってTVみたいからね」

「いい年こいて、アニメばかり見て。このニートルマンが」

「な、ニートだと？いやはや、最近のアニメは馬鹿にできないよ？昔に比べて萌える作品が増えたからね」

うわぁ

今時オタクでも萌えるなんて言葉使わないよ

「僕はいまだに少女向けの48人はポリキュアや寿司都ハルの優越の何が面白いのか分からん」

「君は見た目や言動に似合わず、超熱血だからねえ。ま、健闘を祈るよ」

「そろそろ行ってくるな」

俺たちはPQに挨拶した

「行つてらっしゃい」

これは俺だ

何の捻りも特徴もなく、使い古されすぎて逆に新鮮感漂う模範的な挨拶だね

「いつてらっふぁい」

これは海音

パフェ食べながら喋るのやめれ
そろそろ8杯目に突入しそうだ
大丈夫かこいつのお腹

「だいひょうぶだお、おひよるじょこりゃあ」

何言ってるかさっぱり分かん

「いてら」

これはマントマン
随分と適当ですね

「じゃ、また会おう五徳、海音」

若干一人が無視される中、まばたきをする一瞬にPQは遙か遠くに移動していた

そのさらに遠くにへりから降りた人間が見えた
遠すぎて詳しい内容は分からない

そして、お互いに動き出した

- - -

PQは子善の姿を確認するなり、初撃を放った
右手を横にかざして竜巻を作り子善目掛けて射出した

「ほお、風魔法か。だが、そんな緩いもの俺には効かないね」

対して子善は逆回転の竜巻を作り出し相殺させた
竜巻同士が衝突し激しい風が吹きすさぶ中、PQは目くらましに

なる竜巻の中を中央突破で子善目掛けて突撃した

「君が幹部の子善か。随分と若いね」

PQは螺旋状の巨大な火柱を敵に叩きつけた

「炎系も使えるのか。だが」

子善は2倍の大きさはある水柱で火柱を飲み込み、PQを襲う
PQはそれを避け、子善のすぐ横に接近した

「この時を待っていた。封印術式発動」

「知るか！」

子善は鎖を何重にも巻かれた本を取り出して鎖を外し、呪文を唱えた

すると足下に複雑な魔法陣が描かれた

PQは気にもとめず、子善を殴り飛ばす

子善は体を回転させながら遙か後方へ吹き飛んだ

「これは……禁呪か」

「ああ、そうさ。少々手痛いのを食らったが、代わりに魔法を封じさせてもらった」

子善は起き上がり、地面に手をつく

「俺は世界最強の理系魔導士。闇と光以外なら全ての理魔法で頂点に君臨する」

地面に触れる手から地割れが発生した

瞬く間にPQの下にたどり着き彼を飲み込もうとする

地割れから逃れるために上空へジャンプしたが、ちょうどPQの真下から鋭く尖った岩が洪水のように突き出し、襲いかかった

「激流岩葬！魔法さえ封じれば何もできないだろうよ！」

子善の嘲りに対してPQは微笑を浮かべる

「なぜ僕がわざわざ罠に飛び込んだか分かるかい？」

PQは腕を回転させ迫り来る岩の凶器を軽々と粉碎した
そして空中で巨大な岩の破片をいくつも蹴り、子善に跳ね返す

「ちっ」

子善は目の前に分厚い氷の壁を出現させ、事なきを得た
だが

「スクリューチャージ」

PQは右手をドリルのように右回転させ、氷を貫いた
右手は回転の限界を迎え、ギチギチと捻れている

「この技はチャージも攻撃に使えるから便利だ。そして、チャージ後に逆回転させれば単純に2倍の威力を発揮する。碎ける、チャージドリル」

「ぐっ、うおおお」

子善は何重にも結界を張ったが全部打ち破られ激しい左回転を行う右手がクリーンヒットした

「僕は元々魔法は使わない、いや使えないんだよ。さっき出した竜巻も、火柱も、身体能力も、攻撃も全部ただの力技によるごり押しだ」

5話 1こり押し（後書き）

主人公全然活躍してないですね本当にすみませんでした

この決戦が終わったら主人公が徐々に活躍していくのでご勘弁を

自己満足全開ですが暖かい目で見守ってもらえますと幸いです

デジャヴしました

どうしても戦いの回はギャグが少なくなります（^ー^；）
ギャグ入りたいんですがなかなか難しいです

6話 ちゃぶ台面返し

「なんだよこれ」

俺は呆然としていた

ここからでもはつきりと見える大きさの火柱や竜巻、岩の雪崩が次々と巻き起こり、お互いに軽々と打ち消している

あんなの一つ食らっただけでお陀仏どころか塵一つ残らないぞ

「子善は自然の魔法なら全て最上位のクラスだ。私が現役だとしても嫌な相手だ。何しろ手数が多いうえに魔力も無尽蔵だからね」

マントマンが冷静に分析する

「うん。あと、自然魔法以外の補助魔法や強化魔法も上位以上に位置する力を持つてるから、もはやチートの塊だよ」

海音が11杯目のパフェを食べ終え、感心したように頷く
敵に感心してどうするんだ

「でも、今はPQさんのが優勢っぽいな。そのチートの塊を上回るあの人もチートだろ」

こんなチートだらけの戦いの世界で俺が活躍する場面なんてあるのか？

さっき教わったが、この世界では単純な実力の目安をアルファベツトで表しているらしく、S A B C D E F Gの8段階があるとか

今の俺やマントマンが最低ランクのG

海音がB

マントマンを襲った男がDとE

ごつ相がF

そして、マントマン以外の5勇者と綾鶴の最高幹部は全員Sだとか
余談だが綾鶴のSは4人だから伝説の勇者たちと拮抗している

ただ、経済的な戦いや情報戦、その他の勢力など複雑なため、実際はどうなっているかよく分からないらしい

「少年、確かに綾鶴のSたちは全員チートだ。初めからSクラスの力を持っていて、後はただコントロールすることだけを考えて教育されてきたと言われている」

最初からS……えげつない集団だな

「かくいう私たちも才能はあり、数百年にSまで辿り着いた。だが唯一PQだけは違う」

「え？あんなに強いのか？」

「ああ。数百年前までやつは勇者の中で最弱だった。才能も全くなかったからね」

見た目はエリート風なのにな

「ま、いろいろあったが今はやつが接近戦だけならば勇者の中で一番だな。ちなみに私はビリ」

そりゃ、俺と同じランクだしなあんだ

「戦いを観戦してる中悪いけど五徳くんは自衛の魔法を教えるね」

海音がえへんとふんぞり返って偉そうにする

そつえば訓練役兼ねてるんだつたな

「自衛？攻撃とかは？」

「付け焼き刃で攻撃魔法を教えても敵のが遙かに強いんだから意味ないの！それだったら防御魔法や加速魔法、身代わりとかの逃走スキルを磨いたほうがいいよ」

うつ……つまり戦いに巻き込まれたら俺は逃げ惑ってその間に海音さんが敵を片付けるってことですか

「大丈夫！君は逃げる才能はあるからすぐに上達するよ。攻撃は……豆腐に乗っかってるネギ並みだけど」

「何その微妙な例え！？せめてミジンコとか分かりやすいのにしようよ……」

ここに、女子中学生に世界一情けないツッコミをする高校生がいた

――

「魔法だとか、強化だとか軟弱だ。全てパワーでねじ伏せてあげよう、青二才のもやしっ子君」

子善は身体中に協力な防護結界を展開していたが、ダメージが届いていた

口から吐血し、咳き込む

「ゲホッ、がぼっ。ハア、こんの野郎」

子善は両足に稲妻を纏い、電光石火のごとくPQに接近した
胴体に土神の鎧、右腕に業火の手甲、左腕に氷刃の手甲、そして
暴風雨の翼を生やして近接戦において異常なまでの威力、速度、柔軟性を発揮した

子善は山をも粉碎する氷雪の釜でPQの体を挟んだ
しかし、鋼のように鍛え上げられた肉体に弾かれ、小さな切り傷を刻んだだけに留まった

「おいおい、マジかよ」

「確かに僕の身体能力だけでの威力や速度は君の武装に劣る。だが」
子善は両手を下から上に持ち上げるように動かした

「あいにく僕の真骨頂は豊富な回転技だ。もちろん力によるね」

空を切った腕に持ち上げられるように子善の立っていた土地が逆さまになった

地面が球状にえぐり出され、子善は宙に浮いた

「なっ、地面にも触れてないのに!？」

子善は抉れた大地に逆さまに立っている
その大地に見えない強烈な力が加わった

「潰れる、ひよっこ。年期が違うのだよ」

- - -

「凄い魔法だな。地面が回転してそのまま敵を潰したぞ」

ここまで軽い地震が届くほどの威力だった
もう、アニメでも見るかのように俺はポケットと眺めている

「魔法？ハハハ何を言ってるんだね少年。PQが魔法を使ったこと
なんて一度も見たことがないよ」

「ええ！？あれ魔法じゃないのか？……じゃあ、超能力とか」

「五徳くん、超能力も魔法と大差ないよ。アレは一応列記とした物
理現象らしいよー」

海音がフォローするが彼女もよくわかっていない素振りをする

「あいつは力で回転力なるものを操る。地面をちゃぶ台返しみた
くひっくり返したんだよ」

いや、でも明らかに地面に手を触れてなかったぞ？

「回転力と言ってもよく分からないだろうからやつのルーツを話し

「この紳士なマントマンがね
てやう。」

6話 ちやぶ台地面返し（後書き）

ずっとPQのターンでした
もうちょっとだけ彼のターンが続きます

7話 PQ

PQはある特異な種族として生まれた

その種族は生まれつき魔法が使えなかった

ただ、筋肉を酷使しても肉離れはめったに起きず（代わりに強い痛みが伴う）厳しい苦境も乗り越える強靱な精神を有している

PQはその種族の中でも人一倍才能が無く、馬鹿にされ続けた

ある日彼は自分を変えるべく、他の皆もやっている厳しい筋トレを始めた

人一倍努力をしたが、すぐに年下に抜かれなかなか伸びなかった
今の見た目頃の青年となった時、ひょんなことから4人の勇者一行に加わった

主に食事や物資運搬などのサポートで活躍していた

ある事件で勇者4人は不老となり、ついでに彼も不老となった

勇者一行に着いて行く最中でも筋トレは怠らず、毎日激しい筋肉痛と戦っていた

いつの間にか痛みが苦ではなくなっていた

それから何百年も筋トレを続け、現在に至る

この種族は伸びは悪いが筋肉の限界が果てしなく高見にあった
ただ皆寿命を迎えたり、厳しい筋トレを続けられないためこままで至る者は誰もいなかった

「というわけだ。才能が全く無い、周りが強者だらけでその劣等感

から続けられたと本人は語っている」

「ええー、なんか嘘臭いな」

なんとなく複雑な心境だ

「回転力の話はどうしたんですか？」

俺が言おうとしたことを海音が代弁した
確かに話の中に回転という言葉は一回も出てきてないぞ

「超回復は知ってるかね」

「筋繊維が断裂してその回復の時に余分に回復して前より力が強くなる、筋トレの原理ですよ」

海音がペラペラと得意気に語った
俺も漫画とかで聞いたことがある

「なんでも、その種族は肉離れを起こさないから痛みに耐えうる限り、体が動かなくなるまで筋トレができるらしい。その時の超回復が凄まじいもので、筋繊維が踊るように蠢くとか」

「それと回復に何の関係が？」

「体中が勝手に激しい回復をして自動的に回転力が身につく」

ええええええー
そんな無茶苦茶な

「体組織が特殊なんだと。だからその種族のコークスクリューパンチは天下一品らしいぞよ」

知らんがな

「手を触れないで地面をひっくり返したのは？」

「宇宙で扇風機を回すと扇風機自体も回るだろう？それを複雑怪奇に難解な理論で行ってるって……らしい」

つまり自分が回る力を他の物に移してる……ってことか？？

話によると空間ごと回したとか

いろんな意味でハッスルしすぎだろあの人

- - -

ビシッ

岩に亀裂が入り、粉々に割れた

割れ目からは子善の怒りのような炎が吹き出している

「ハアハア、ぶち殺す。リミッターを解除する」

「やはり今までの力は力を抑えていたか。僕のことをなめすぎだ。まあ、本気を出したところで」

「同じSランクだからって実力の優劣はある。ここからは同等の戦いができると思うなよ凡人が。才能の差を見せてやるよ」

子善の歪な笑みと歪な怒りにPQは僅かにたじろいだ

（僕が恐れた？だが、データによればさっきまでのやつのは半分程度だ。焦る必要はどこにもない）

「今までの4倍だ」

「!？」

子善のデータは大量にあり、それを元に戦力を導き出していた
だが、これまでの20年間強、彼は全くもって本気を出していなかったらしい

「光栄に思え。お前は俺の本気を初めて引き出した人間だ。今日でお別れだと思うと本当に残念だな。来世では一緒に飲みに行ったりモン。ンやろっぜ」

7話 PQ（後書き）

次回は予想通り子善のターンです
そろそろこの戦いも終わります

8話 電磁砲と空間歪曲

「ハハハハハハ、死にさらせえ」

子善の眼前に何重にも重ねられた魔法陣が描かれる
魔法陣から筒状の黒光する鉄の物体が姿を現した

「接近すればそんなものは意味を成さん」

PQは子善に一気に詰め寄ろうとする
だが、子善はPQを後退させるためだけに上級魔法を連発した

「おおつとお、そこを動くな勇者さん。最上級の魔法をお見舞いするんだからな。ヒヤハハ」

「ちっ、小賢しい」

上級魔法を連発してるが、ついさっきまでの魔法より桁違いな威力だった

前から迫り来る奇怪な木のツタを回転させ地面に叩きつけるも子善は横、上、下、果ては後ろからあらゆる種類の魔法を繰り出す
わざと直撃をさけ、その場に縫い付けていた

「充電完了。電気系最上位魔法『電磁波動砲』発動」

耳をつんざく音が轟きながら、大砲から眩い閃光が放たれた
大容量の白い稲妻が刹那にしてPQの体を捉えようとする

PQは電撃の線上の空間に風を回して分厚く丸い縦を何重にも生み出し、地面を持ち上げ岩山を立てた

しかし、あっさりと防壁は破られ稲妻のレーザーはPQを飲み込んだ

レーザーの軌跡には大きな窪みが残り、後方の山が消し飛んでいた
ブスブスと焦げ臭い匂いが鼻をつき、黒こげている

「カカカツ、俺の勝ちだな」

もくもくと立ち込める煙の中から腕が飛び出し、子善の左肩を裂いた

肩から鮮血が舞い苦悶の表情を浮かべる

子善はPQの射程圏内から離れようと突風を体に纏い宙へ浮いた

（ぎああっ肩があ、こいつアレを受けてまだ動けんのか！？）

「時空間回転歪曲」

PQは両腕を上下に構え、空気を掴むようにして大きく回す

バリバリバリと破れるような音がして宙に浮く子善の横の空間が避けた

吸い込まれるような渦を巻き、周りにヒビが入る

（なっ、空間を無理やり歪めやがった……！こんなの、渡希^{とき}クラスの時空間能力者でないとできない芸等だぞ）

「ふんっ、少しズレたか」

ぶちい

子善の左腕が時空の歪みに直撃し、肩の部分まで腕をもぎ取った腕はねじ曲がり粒子となって空へ散る

肩の裂け目から千切れたため傷口は平らだった

もし、肩が裂けてなければ胴体の半分を歪みに持っていけたかもしれない

「ぎいあああああああああああああああ！」

絶叫が木霊し、傷口から血が噴出する

コントロールが定まらないまま本能的に右手を前に差し出す全体に効果のある低い山まで届きそうな津波を発生させた

「ちっ、威力より目くらまし目的か」

PQは津波を引き裂き直撃を免れた

子善の姿は消えていた

（あのひよっこめ、隠れやがったな）

PQは強がっているもののダメージは著しい

至る所に傷を負い、電撃を受けたために身体は麻痺して自由には動かない

（痛いのは慣れてるが……何本か骨が折れているな。僕と子善との戦況は五分といったところか）

子善は身を隠し治療魔法を行うが左腕は戻らず、止血だけに止まった

（がああ、いてえ。あいつ、電撃が直撃する直前に避けられないと

知り、体を擦りながら直進してきやがった……！

まさに両刃の剣だ

防御を捨て、攻撃に走った

（油断していた。少なくとも警戒していれば左腕は失わなかった）

子善は自分の愚かを悔やんだ

頂上決戦の終焉は静かに幕を開けた

- - -

「視界が白くなったと思ったら向こうの山が消えた!？」

俺は強烈な光と音に耐えられず目と耳を塞いだ

海音に治癒魔法で目と耳を回復してもらった

「あうう、目が痛いよお……」

海音は涙目になりながら自分にも治癒魔法をかけた

「目が、目がああああああ」

マントマンは地面をのたうち回っていた

全く役にたたねえなその仮面

「い、今のは電気系統の最大魔法だな」

遠くを見ると子善は姿を眩ましていた

「くうー、紳士にはきついね。どうやらPQはあの電撃を食らった後、反撃を試みたようだ」

マントマンが指を指す先の現象を凝視する

何だ……あれは

空が割れている？

「ねじ曲がってますねあの空。時空間魔法でしょうか」

「いや、力で時空をねじ曲げたんだ」

何のこっちゃさっぱりだ

現実のものとは思えない光景に頬がひくついた

「雷の最大魔法と時空のねじ曲がり、おそらく互いに無事じゃ済まされないだろうねえ」

マントマンは割と呑気に分析する

「つまり、戦いの終焉は迫ってるってことですね」

8話 電磁砲と空間歪曲（後書き）

説明忘れてましたが竜巻は空気を回して、火柱は空気を摩擦させて起こしてるそう

それぞれ別のコツがあるみたいです

長かった戦いも次で最後です（多分）

9話 4連

「よくも俺の左腕をおおおお！」

子善は右手に魔力を溜め、魔力そのものを高エネルギーとして乱射させた

「自暴自棄になるとはな。攻撃がデタラメすぎる」

魔弾は拡散し、雨のように四方八方からPQを襲う

魔力は無形で鞭、散弾、追撃、加速、減速、分裂、集中、斬撃、打撃、貫通など様々な現象を不規則に行う

PQは大半を撃ち落とし、鋼の肉体で耐えるが体へのダメージは確実に蓄積されていった

「仕方がない、飛ぶか」

PQは両腕を横に広げ、体を横回転させ宙を飛んだ
魔弾を弾き、ジェット機のごとく子善に突撃する

「魔弾はただの時間稼ぎだあ。大地系最上位魔法『スターグラビティ』」

山を軽々と越える重力の巨魁の球体が発生した
凄まじい地場により周りの地面がえぐり取られ、PQも引きずり込まれる

「うぐぐぐ」

PQは自分の体と重力球の間に壁を作った
その場から全く身動きが取れない

「全魔力を注いで、貴様をここで討つ。炎系最上位魔法『バーニングブラッド』植物系最上位魔法『生命の樹海』風系最上位魔法『ジャイアントトルネード』」

燃えたぎる活火山によるマグマの大噴火

全てを貫き生命を吸い上げる無数の巨大な木のツタが地面からせり上がった

天候を変えるほどの影響力を持つ大竜巻が一斉に襲いかかった

（重力球といい、最上位を4連発だと……？イカレてやがる）

PQは重力球を空間歪曲で中から膨張させ霧散することに成功した

「空間歪曲なんてそう何発も打てん。何とか力押しで」

無数のツタにより飲み込まれ、身体中を貫こうと鋭利な先端がいくつも突き刺さる

腕や足、胴体にツタが巻きつき体力を吸収していく

「根こそぎ引っこ抜いてやる。地盤回転！」

大地が盛り上がりツタが全て引きちぎられる
巻きついてたツタたちは死滅した

「あと2発……！これに耐えれば子善へチェックメイトだ」

いくらSランクといえどこれだけのものを連発したのだ
防御は手薄になり上位以上の魔法はしばらく使えないとPQは憶測する

そんな彼に死の噴火が猛威を振るった

（体の周りに何重もの強固な結界を張り、マグマの軌道を逸らす）

空間を回転させるがマグマは僅かにズレただけに留まった
そのまま身を丸くしたPQを包み込む

「……………」

声が出なかった
ただただ地獄の時が過ぎるのを待つばかりだ

「トドメだ老兵イイ」

PQは体中に火傷を負い、筋繊維も断絶
地面にうずくまった

「体が……動かないだと……」

あと一撃耐えれば
しかし、限界を越していた
根性だけではどうにもならないぐらいには

「これをやると……三日月三晩動けなくなるが死よりはマシか」

鉄をも切り刻むかまいたちを内包した死に神の風は目の前にある
3つの最上位魔法がそれぞれ相殺しないよう、子善は時間差で繰
り出していた

生と死の淵をさまよう中PQは素直に感心していた

ただか20数年しか生きていないのに自分の数百年の努力を捻
りつぶす子善に対して

あれだけの魔法を操るとなるとコントロールだけでも、それ相応
の訓練が必要だ

PQは年上として、伝説として、五徳や海音たちへの威厳を保つ
ために普段は絶対使わない禁じ手を発動した

9話 4連（後書き）

終わりませんでした

次回はきつと終わります

10話 決着

「終わったのか……？」

「……みたいだね少年。とりま連絡するかね」

天変地異が起きた

黒い謎の球体が現れてここまで離れてるのに体が引きつけられて
海音が掴んでその場に留めてくれた

うねうねした木のツタや火山噴火や最初の竜巻の数倍はある竜巻
が巻き起こった

結果、草原や森、山、川など自然に満ち溢れていた絶景は焼け野
原と化した

「あーもしもし、マントマンですよっと。うん、戦闘修了。端的に
言っと引き分けだね」

災害が過ぎ去った後、遠くに両者供倒れているのが確認できた

「あの4連撃の後、勇者さんは敵さんを打ち取ったみたいだよー」

海音でもPQがどうやって子善を倒したのか分からなかったらしい

「はは……付き合ってられっかよこんなファンタジーに」

- - -

「……………」

（声が出ねえ。一体どうなった？）

子善は空を見上げながらボーっとしていた

（そうか……戦いは終わったのか。最上位魔法連発した後、確か -
-）

仕留めたと思った

だが、PQはそれでもなお立ち上がり、子善にストレートの拳を食らわせた

防御魔法をロクに展開できなかった子善はそれだけで体の半分が碎けるほどの重傷を負った

「……僕としたことが引き分けか。こんなアホみたいな怪物があと3人いるとか気が遠くなるよ」

対してPQも満身創痍で倒れている

そこに2人の女が現れた

「子善様、お迎えに来ました。……随分とひどくやられましたね」

綾鶴側の女は子善を担架に乗せてへりに運びこむ

年は二十歳そこそこで背中に大きなケースを抱えている美女だ

髪はストレートで目は細め

物静かなお嬢様ぜんとした気品が感じられるが背中には、禍々し

くもどこか美しい狙撃銃を背負って、自衛隊が着るような防護服を着ている

「大丈夫かPQ。すぐに特別病院に運ぶぜ」

こちらも二十歳ぐらいの女だ

金髪の髪をポニーテールに括り、モデルのような顔立ちとスタイルをしている

服装はジーンズと胸元を強調する西洋映画に出てきそうな服だ

ただ、口調や仕草が粗雑で狙撃手の女とは対象的だ

PQを担ぎ上げて戦闘用特殊ワゴン車に運び込む

2人はお互いに睨み合った

「よお、貧乳。今ここであたしがお前とお前の上司を消し炭にしてやろうか？」

「黙りなさい野蛮人。私の彼氏があなたを蜂の巣にしますよ？それにお互い今は撤退するのが得策でしょう」

PQ側……シャルは舌打ちをして車を走らせた

子善側の狙撃手、アリスもそれ以上は語らずにヘリを発進させる

「あームカツクあの根暗女。あんなでもあたしと同じAランクってんだから世も末だぜ全く。いつかぜってーボコにしてやる。あつ、ゴルドの変態オヤジに連絡入れんと」

- - -

「うむ、分かった。後のことはよろしく。私は今後北の方へ行く」

「なあ、引き分けてつまりどうなんだ？」

確かなんかの利権を巡ってるとか言ってたよな

「ああ、利権のことなら半分こってことになったよ。何しろ引き分けたからね」

うーむ

利権とやらが気になるが……ま、いつか

「北に行くということはあたしたちとはお別れになりますね」

そういえば俺たちは事前に連絡を取ってある協力者と落ち合うんだっけか

それには近くの町に行くとかどうとか

「なあ、あんたさっきPQさんを病院へ運ぶって言ってたろ？コネがあるなら別の人たちに俺たちを送ってもらうことは」

「残念ながら私は彼女としか連絡を取れないんだ」

……さっきこのマントマン、暗殺者たちに襲われてたな何か深い事情がありそうだな

「あんた一人で大丈夫か？こっちは海音がいるけど」

「大丈夫大丈夫。安全なルートを通るからね。じゃ、また機会が会

つたら会おう。シーユーアッゲエイン」

アゲインの部分だけ妙に発音よく言い、マントマンは去っていった

「じゃ、あたしたちも行きましょー。ここから一番近い町は東にあるカイマってところだよ」

結局俺と海音の2人旅か

……なんか腑に落ちないな

伝説の勇者に会ったってのにその人らの協力を仰げないなんてマントマンはともかくPQの繋がりとかは？

「あ、降りる前に軽く魔法教えるね。今のままじゃ、ゴミ箱の下にある足で踏むと蓋が開くアレより役立たずだし」

「だからその微妙な例えやめてくれよ！」

とにもかくにも俺の旅は始まったばかりだ
疑問なんていつか解決すんだろ

救世主になるってことはいつか俺もあの領域に達するのか？

まあ、目下の目標は少なくとも海音を守る程度には強くなることだな

10話 決着（後書き）

分かりにくいことが多くて本当に申し訳ないです
文章力が足りなさすぎますね…

ある理由があって現在のPQとマントマンの協力を仰ぐことができないんです

なので自力で町まで行くしかないという状況です

いつか理由書きます

次回からはコメディ要素も入れます（＾－＾；）

11話 武器と魔具

俺、竜兎 五徳は現在中学2年の海音に魔法を教わっている
海音はいつの間にかセーラー服から私服に着替えていた

「俺でも魔法使えるのか？」

「うん。この世界は大気中の魔力が濃いから元の世界より格段に魔法を使いやすいんだよ。あたしも魔力の増幅を直に感じたしね」

海音は背中のケースから杖と刀を取り出した

「素手で魔法使う人もいるけど、基本的に何か媒体になるものを使ったほうが効率的なんだよ」

そういえばあの子善とかいうやつは素手でデタラメな魔法使ってたな

まあ、あれは例外か

「んで、媒体には武器タイプと増幅タイプの2種類があるんだよ。武器タイプの例がこれ」

右手に携えた刀を掲げる

「武器タイプは直接攻撃に用いるの。魔法効果を付加してね」

刀に青白い電気が流れ適当に降ると地面に斬撃と共に小さな雷が落ちた

「ふーん。ところでヘリとか飛んでたけど科学も発達してんのか？」

「うん。元の世界ほどではないけどねん。魔法世界は現世に魔法を、現世は魔法世界に科学の技術を提供してるんだって」

けど、現世は大気中の魔力が薄いから魔法はあまり一般大衆に知られていないのか

「それで、増幅タイプがこっちの杖だね。主に後衛で戦うタイプかな」

海音は左手の杖を構えると15メートルは離れた岩が宙に浮いた

「増幅タイプは使う魔法の力を上げてくれるの。ただ、接近戦には向いてないかな」

海音は武器、増幅2種類を使い分けてるってことか

いろんな場面で対処できる反面、扱いが大変ではないのか？

まだ中学生なのにBランクだったり、器用なやつだ

伊達に英才教育を受けてきたわけじゃないんだな

「そこで、君に武器タイプと増幅タイプどちらか選んで欲しいんだ」

「つまりインドア派かアウトドア派ってことか」

「うーん……まあ、そういうことでいいよ。君の頭脳には期待してないし」

海音は目を線にして愚痴をこぼす

ほっとけ

「あ、あたしの手持ちの武器、魔具を見てから決めていいよ。新しいのを手に入れるまでは、当分あたしのものを使ってもらうから」

海音はケースをこそごとと漁り、いろんな武器、魔具を取り出した四次元ポケットかそのケースは

「ああ、このケースは魔術が施されていてね、収納量が大きいんだよ」

ふーん、マジ便利だな魔法

海音は丁寧に武器と魔具で2つに分けた

「どれどれ」

まずは魔具から見よう

- ・ ティーベア
- ・ 物干し竿
- ・ 1年と2カ月前のジャン。
- ・ 無数のお札が貼ってある赤黒く変色したボロボロの本（タイトル不明）

えええー

なにこれえ

「あの、なんスかこれ」

「魔具」

可愛らしいテディベア……いや、案外アリかも。他に比べたら物干し竿……うーん、まあ杖だと思えばいいか

1年と2カ月前の。ヤンプ
ノーコメントで。

ホラーな本
ないないないない。使ったら呪われそうだ絶対。マジこえーよ、
血だよね？この赤黒いの

「オススメはその料理入門：人編中級かな」

「これ、人を食材とした料理の本なの！？」

うーん……

この中ではテディベアと物干し竿がマシかな

「武器のほうも見てみるよ」

・テディベア

・先端にピチピチと活きのいいアンコウが刺さってる包丁

・2年と7ヶ月後のマ。ジン

・の

「このマガ。ン読んでいい？」

「どうぞどうぞ」

へえー、半分以上知らない漫画になってるな……って

「過去のものなら分かるけど、なんで未来の持つてるんだ？」

「内緒」

そもそも漫画雑誌を魔具にするとか何があったんだよ

さつきもあつたよねデイベア。全くもって同じ形してるぞこれ
包丁に刺さってるアンコウ生きてるよね絶対

「我は案 行。聖霊だ」

……俺は何も見なかった何も聞かなかった

ちようちんアンコウが喋ったなんてただの幻覚だ

の

これが一番謎だ

「なあ、なんだこれ」

「の」

いやいや、海音さんそれは分かります

この『の』の形をした謎の物質が何なのか教えて欲しいんですよ

「オススメは案 行かな」

「ふっ、照れるじゃねーか嬢ちゃん。我のちようちに触れるなよ
危ないから」

「……」

わあ、どれにするか迷っちゃうなー
俺は泣きそうになった

12話 喧嘩

とりあえず俺は物干し竿を使うことにした
これが一番マシだ

「まずは魔力を練ってみよう！」

海音が手本を見せる
ぼつと杖の先端が淡く発光する

「いや、練ってみよう！と言われても」

「簡単だよ。体の力を抜いて、周りの空気から魔力を集めるよう強くイメージするの」

うーん、どう見ても普通の物干し竿（青）にしか見えん

「大事ななのは自分は魔法を使えると信じこむこと。例えば呼吸する、立つ、歩く、走る、座るみたいに当たり前のことと捉えるの」

俺は強く念じる
でも、普通の人間にできるのか？現世の人間に可能なのか？とあらゆる雑念が頭を閉める

「むー、雑念が多すぎて集中できてないみたい。集中できるよう、いろんな方法を実践してみよう」

1、呼吸を止める

「ぐぐぐぐぐぐ」

(魔法魔法魔法魔法魔法魔法息が苦しい苦苦苦苦苦しし)

一分半経った時、ぷはあっと息を吐こうとした『ぷ』のところで
柔らかい何かが口を塞いだ

海音が後ろから俺を羽交い締めにして鼻と摘み、口を手で覆いや
がった

「もうちょつと、頑張りましょー」

「もがまがげもー！ー！？ § @ ● → Ω」

抜け出そうともがくが、その細腕からは想像もつかない力で押さ
え込まれる

それから二分半してようやく解放された

「ゲホッ、ゲホッゲホ、うごえええ、ガハガハッこ、殺す気かおま
……ゲホッ、ハアハア」

「いやー、思ってたより五徳君の肺活量と根性がなかったから手助
けを。も一回やろっか」

えへへーと海音は頭をさすりながら可愛く笑う

こ、こんの殺人中坊が

俺は涙目で咳き込みながら告げる

「ゲホッい、いや息止めても苦しくて集中できん。ほ、他の修行にしてくれ」

「むむー、分かったよー」

2、叫ぶ

「心の底から叫ぶとスッキリして集中力が増すと思うわけですよあたしは」

いや、俺はそうは思わないが

「叫ぶって何を」

「あつ、このあたりに人はいないから近所迷惑にはならないから安心して」

どうもたまに会話が噛み合わない

「いや、そうじゃなくて具体的に何を叫べば」

「それは……悩みや恥ずかしい出来事とか。ストレス発散にも効果的」

……

女子中学生が見てる目の前でそんな恥ずかしいこと叫べるか！

「……………俺、弱っちいー」

「なめてるの？修行」

海音さんが笑顔を崩した
ひいっ、無理ですよお

「仕方ないなあ。協力するよ」

「へ？」

咄嗟に頭上に構えた両腕のガードを解く
海音は自慢の杖を取り出し、それを俺に向ける

「さあ、思いつきり叫んでくださいな」

俺は強制的に最近あった恥ずかしいことや悩みを叫んだ
究極の羞恥プレイでした

「妹もののエロ本が好みなんだね」

「ぐうわああああ」

「1ヶ月前おねしよして、ショックで学校休んだ」

「ぐはあっ！」

「学校で授業中に」

「ストップストップストップ！ごめんなさい許してくださいもうそれ以上は」

俺は泣きながら土下座した

「ま、このくらいにしますか。次こそは成功だ！」

「おー」

俺はもはやヤケクソでどんな羞恥にも耐えてみせると誓った

3、恐怖

「じゃ、ここからバンジージャンプしてみて。大丈夫、物干し竿は紐で手にくくりつけてあるから途中で落とさないよ」

羞恥プレイのほうがマシでした

滝の流れる崖に移動し、海音にバンジー用の紐を体に装着された横ではゴウゴウと勢いよく滝が流れ、下には川が広がっている

「こ、これはマジ勘弁してください。無理です嫌です」

「君がさっさと魔力を練ればこんなことしないよ。いいから行ってきなさいな」

海音が脇腹をくすぐる

「わっ、やめろ、くすぐっ……あ」

俺は絶叫をあげながら落ちていった

川に落ちずに紐の収縮で体が一度上に持ち上げられたが、信じられないことに紐が切れて川に落ちてしまった

「……………」

「あの……ごめんなさい」

今回ばかりはさすがの海音も汐らしく謝っていた
物干し竿に服をかけて乾かしながら黙々と夕食を食べる
海音は焚き火を挟んで俺の対面でしょんぼりとしている

あの後、日が暮れたので川で魚を取って夕食にした
若干冷え込んできたから魚を焼くがてら焚き火を焚いた

「まさか紐が途中で切れるとはね。あたしの不注意でした」

「……はあ」

「むむむむむー、さっきからずっといじけてばかり。何なの男がいじいじして。そんなだから魔力も練れないんだよ！」

キレられた！

確かになかなか上達しないけどさ

ちなみに海音から俺の私服を渡された

何でも入ってますねそのケース

「んなこと言われてもできねーもんはできねーよ」

「それは集中力が足りないからだよ！だからいろんな修行したのに！」

「あれのどこが修行だ！？あんなのただの嫌がらせだ！」

「何よ！文句ばかりで自分の無能を棚に上げて。小さな子供だって魔力ぐらい練れるよ！」

「この世界の化け物たちと俺を一緒にすんなよ！もういい、帰る」

制服をかけてある物干し竿を制服ごと掴んでその場から逃げ出した

「あ、どこに行くの！？そっちは猛獣やモンスターが」

海音の言葉を振り切り俺は森の中に駆け込んだ

逃げ出したところで帰れやしないことは分かっている

確か一年は現世への扉が開かないとか

「ついカツとなって走ってきたけど……上達しない俺も悪いよな。あいつはあれでも一生懸命教えてくれてるんだし」

ただ内容はどうかと思うが

戻ったら謝ろうとして、来た道に体を向けて歩きだした
しばらく歩くと道が2本に分かれていた

「……あれ？どっちだっけ」

- - -

「はあ」

海音は五徳が去った後、ため息をついていた

「あたしも言い過ぎたかな。相手はついこの間まで魔法を知らなかったんだし、無理もないか」

森の中には獰猛な猛獣や、普通の人間は見たこともないモンスターが潜んでいる

海音は重い腰を上げてしょんぼりしながらも、五徳搜索に乗り出した

（あの頼りない高校生が世界の救世主……予言は100%じゃないし、間違っていたのかも）

海音は憂鬱な気持ちで喧嘩した五徳とどう接するかを考えた

「でも、絶対にこっちからは謝るもんか！魚だってあたしが取ったものだし、火だってあたしが起こした。役立たずの五徳君め」

- - -

「ぐるるる」

「あの、え？マジすか」

その頃、五徳は道を間違えて熊に遭遇していた

13話 熊との死闘

「く、熊……？」

視界の先にはぐると低いうなり声を上げる熊が悠然と立っている

（熊に遭遇したらどうすればいいんだっけ？）

単純に走って逃げようにも、熊は人間より遥かに速いからすぐに追いつかれる

木登りも上手いと本に書いてあった
となると……

（食べ物を少しずつ地面に置いてゆっくり後退する、だったかな）

しかし五徳は食べ物を持ち合わせていない
装備は汗ばむ手で握る物干し竿と制服だけだ

（刺激せずにゆっくり後退するしかないか）

俺は音を立てずへっぴり腰で後退し始める

（よし大丈夫だ。熊は襲って来ない）

熊は五徳を観察している

しかし、五徳の願いむなしく熊は雄叫びをあげた

「ぐるるるあああ！」

（ちくちようが！）

五徳は熊の突進にほとんど反応できずに立ち尽くす

物干し竿を構え熊の爪が炸裂した

幸運にもたなびく制服が目くらましとなり、爪が逸れた

それでも鋭いひっかきは物干し竿の腹をとらえた

制服は引き裂け五徳の体は慣性の法則に則り、逃げようとしていた道へ吹き飛ばされる

落ち葉がクッションとなり2、3回バウンドし、静止した

「があっ……痛い」

もし後ろが障害物のない道ではなく、岩や木があつたなら即死だった

物干し竿を眺めると爪痕がついているだけで奇跡的に折れていなかった

おそらく魔具だけに魔術的な細工で耐えたのだらうと憶測する

（立ち上がって逃げる俺よ。脱兎の五徳の名が伊達じゃないことを証明しやがれクソツたれ）

自分の不名誉なあだ名を思い出す

救世主がなんだ、勇者がなんだ、綾鶴がなんだ、熊がなんだってんだ

とことん逃げてやるという執念だけで無理やり立ち上がった

熊は目の前まで迫っていたがま寝た状態で襲われるよりは天と地ほどの差がある

（万事休すか）

五徳は自分の死期を感じた

ごつい男に襲われた時はマントマンに、PQに救われた
海音とは喧嘩したので当てにできない

（最後まで人便りか。ヘタレもここまで来ると……いや、どこまで
行ってもヘタレか）

五徳は不思議と落ち着いていた

（最後までヘタレ、脱兎の五徳の殻を捨ててもいいかな）
五徳は目の熊に向けて物干し竿を思い切り叩きつけた

- - -

獣のうめき声が聞こえ、その方向へ向けて海音は走り出す

（五徳君、猛獣に襲われたのかも！）

あたしが辿り着くまで、謝ってもらうまで生き延びてと、密
かに祈った

- - -

「ああああああ！」

竿は左から右へ弾かれずに振り抜けた

熊に当たれば弾かれるはずだから外したと確信する

五徳は恐怖で目を瞑っており、閉じた目から涙が零れ落ちた

「……？」

いつまで経っても熊の攻撃が来ない

勇気を出して瞼を開くと、熊は仰向けにひっくり返って苦しそうにしていた

「え？一体何が」

ふと、物干し竿を見ると先端が木にめり込んでいた

「熊をぶっ飛ばしたのか？この竿で、この俺が？」

竿は微かに光り輝いている

「魔力を練って、力を付加するのに成功したんだ……！」

火事場の馬鹿力とでもいうのか

あの土壇場で魔力を練るところか、次のステップである魔力の性質変化までたどり着いた

（だったら話は早い。このまま熊を気絶させてやる）

今度は逆に五徳が熊目掛けて突進した

勢いよく起き上がるうともがく熊に竿を叩きおろす

「沈め！」

バキッ

- - は？

熊の前足によるカウンターで竿は見事に真ん中から真っ二つに折れた

衝撃に耐えきれず、五徳は地面をゴロゴロと転がりさっきの木に体を打ちつける

「ガハッ！な、なんで？」

竿は光を失っていた

魔力を練るのに失敗した模様だ

「そんな……」

熊はようやく起き上がり、獲物を鋭い眼光で捉える
絶望が五徳を支配した

14話 物干し竿の最後

全身に痛みが走る

何度も吹き飛ばされたせいでダメージは大きく蓄積されていた

（折れた竿で熊公に対抗できるのか……？）

ど真ん中を折られたことでリーチは最小となった

例え再び魔力を灯しても熊に届く前にこっちがやられる

「今度こそ万策尽きた……か？」

五徳は今寄りかかっている木を仰ぎ見た

五徳と木と熊は一直線上に並んでいる

木の幹には竿で傷つけた決して小さくない痕が

「……一か八かやってみるか」

熊が鳴き声をあげ威嚇する

「無理でも何でも発動しやがれええええ！」

五徳は折れた竿の尖った先端を木の傷に突き刺した

（魔力を先端に集約。そして破裂しろ！）

五徳は何度も強く脳内にイメージする

破裂、爆裂、炸裂、爆発、爆破、解放、破壊、粉々、倒壊、霧散、
四散、拡散、分散、分離、暴発、発破、大破、波動、撃破、膨張…

……

ただ爆破するだけでなく、目的と壊す範囲や威力、二次被害などの
爆破後の映像を鮮明に脳内に描いた

「吹き飛ばし！」

竿の先端に青白い光が集まる

光は一度収縮し、一気に拡散した

強烈な閃光と音を生み出し熊が怯む

両竿の先端から爆風が巻き起こり、木の幹が消滅した

空洞の空いた木が熊めがけて倒れこむ

グシャアという不快音と共に熊の脳天に直撃した

熊は短いハウコウをあげ動かなくなった

「ハアハア、やったのか……？」

五徳は魔法による爆風に体を委ね危険から回避していた
無論ダメージはさらに重なり、一人では立てない状況だ

「ぐるる……」

ふと、小さな熊が現れ大熊に寄り添った

小熊はなんとなく悲しみを孕んだような鳴き声をあげる

「もしかして親子なのか？」

殺してしまった

殺さなければ自分が殺されていたため後悔はないが、いたたまれない気分になる

「俺に…… 気絶で済ませられる技量があればな」

五徳は味方にも敵にも、無駄な犠牲を出さずに済むように強くなるうと心に誓ったのであった

「大丈夫！？五徳君！…… ひどい怪我だよ、早く手当しないと。あの熊、君が倒したの？」

五徳を見つけた海音は慌てて側へ駆け寄り、傷ついた体を抱き上げた

「ああ、火事場の馬鹿力で魔法の発動に成功してな。物干し竿は大破しちゃったが」

「魔法って…… 魔力を練るのはともかく魔力の性質変化に成功したの？」

熊や木の様子を見て海音は状況を把握した

「らしいな。さっきはごめん、俺が不甲斐なかった。また魔法を教えてくれないか？」

五徳の謝罪と懇願に対し、少女は仕方ないなとため息をついて笑顔で答えた

「あたしもちょっぴりやりすぎたよ。結果的には上達したっぽいし。

これからも一緒に頑張りましょ」

「ああ」

ここで五徳の意識は途切れた

- - -

「子善様の容体は？」

背中にライフルを携え戦闘服に身を包んだアリスは、綾鶴お抱えの医師と治療師に問う

「はい。左腕の損壊といくつかの臓器の破損、神経系にダメージが。臓器は魔科学の粋を尽くし、代替の臓器で補いました」

医者が矢継ぎ早に現状を説明

「子善様は特殊な肉体構造をしているため、左腕の再生は失敗に終わりました。そして脊髄の一部が麻痺し、両足も機能しません」

治療師は子善が今後は車椅子で過ごす必要があることを語った

「Aランク以上の治療師がいれば話は変わるのですが……我々の不甲斐なさをお許してください」

「いえ、あなたたちは全力を尽くしました。治療師でBランク以上ですら大変希少なのです。胸を張ってください」

アリスが治癒師を労う

Bランクの治癒師は一礼し去っていった

「あなたは今後も子善様の治療をお願いします」

高名な医者は頷き、自分の職場へ戻る

「あそこまでダメージを受けてまだ生きているとは……しぶとい人です。綾鶴グループ最高幹部というだけのことはありますね。願わくば勇者と共倒れになってもらうのが一番でしたが」

アリスは綾鶴グループの病院を後にした

- - -

「やつ。目覚めた？」

「ここは……」

五徳は体を起こす

どうやら気絶してそのまま朝を迎えたらしい

「あいだだだだ！？」

体中に激痛が走り、目に涙を浮かべる

「無茶するからだよ全く。そんなに大したことないから歩けるよ。」

さあ、立って」

五徳はばんつと背中を強く叩かれた

「ぎゃあああああ！」

「あはは♪」

（それにしてもイメージだけで魔術を発動……普通そんなことはできないはずなのに。予言の通り彼には何かあるのかも）

イメージしただけでは魔法は発動しない

魔力を練る方法とは違い、複雑な発動課程が必要だ

2人は朝食を済ませ、山を後にした

15話 自分殺し

「なあ、まだカイマに着かないのか？」

「もうすぐだよー」

山を後にして4日が経過したが未だに景色は草原や山ばかりだ
この大陸の半分以上は開発が進んでおらず、自然に恵まれているらしい

「それにしても五徳君、上達早くてびっくりしちゃったよ」

日が沈み、夕焼け空になるとケースからキャンプセットを取り出して、安全な場所で野宿をする

毎日野草や野生の動物を狩ったり魚を捕まえて食料を調達している
もちろん海音が

「逃げ足だけは才能があると自負してるからな」

五徳はえへんと偉そうに歩く
毎日夕方から海音の訓練を受けているので、少々魔法を使えるようになった

「あまり威張るところじゃないと思うけど……攻撃系は全く上達しないし」

「うっ」

魔術だけでなくキャンプのマニュアルや世界の情勢、そして肉弾戦についても習っている

傷はほとんど癒えたが、毎日筋トレと歩き続けで五徳の体は悲鳴を上げていた

「あー体の節々が痛い……。カイマってどんな町なんだ？」

「洋風で穏やかな田舎町ってマントさんが言ってた。いくつも風車があって町の名物なんだって」

「ふーん」

カイマで詳しい地図を手に入れて、南西の海岸にある大都市に行くとか

その大都市周辺はこの大陸で最も文明が進んでいる

ここらへんは交通の便がない秘境で携帯（この世界にもあるのか）の電波も通じない

でも、マントマン携帯使ってたような……

「あれは無線であらかじめ仲間が近くに待機してたらしいよ」

「ふーん。あつー！」

五徳は遠くに町を見つけた

- - -

PQが目を覚ますと見知った天井が目に入った
体や顔には包帯がグルグルと巻いてあり、いくつかの点滴チュー
ブが

側に治療用の魔石が設置されている

「よっ、PQの旦那。本当にタフネスだねえ」

「シャルか。僕と子善の戦いの結末はどうなった？」

「引き分け」

「……そうか」

PQは無表情で点滴のチューブを抜き始めた

「ちょ、あんた何やってんだ！」

シャルは慌ててPQを止める

「いや筋トレを。大分衰えてしまったからな」

「んな体で無茶ゆーな！……そんなことよりあんた、禁じ手使った
よな。これ以上は体が持たねーからもう使っなよ」

「いざという時しか使わないさ」

以前にも数回発動したことがあるが、使う度に副作用が強烈にな
っていくことをPQは実感していた
筋肉は以前より著しく衰えている

「とにかく筋トレは禁止だ。鍛えたいなら早く治しな」

「ふん……ところでご飯の件だが、朝昼晩全て牛丼にしてくれないか」

「……知るか」

子善とはまた再び決着をつける必要があるな、とPQは漠然と考
えていた

-
-
-

「よ、ようやく着いた」

五徳は地に膝をつき、へたり込んだ

「おつふろっ♪お風呂っ♪」

道中水浴びだけだったので久々のお風呂に海音はご機嫌だ

「何事も起こらなければいいけどな」

「おい、お前たち。この町には近づかないほうがいいぜ」

五徳と海音は声の方向へ振り向いた

その男は二十歳ぐらいの青年で、眼光は鋭くフードを頭から被っ
ている

「気をつけて五徳君。あの人可以りできるよ。多分あたしと同ランク以上はある」

「ああ、こいつの殺気でやばいやつだってことは分かる。誰だお前？」

2人は男の放つ殺気に対して自然と警戒した

「俺の名は130号」

男はフードの隙間から2つのダイナマイトを取り出し、着火した

「130号が呼びづらいならそうだな。爆破屋が自分殺しとでも呼んでくれ」

16話 襲撃者

130号と名乗る男は2つのダイナマイトを地面に叩きつけた

「なっ？」

ダイナマイトの片方からは眩い閃光が、もう片方からは爆音が

（ダイナマイトに見せた閃光手榴弾と音響弾……別方向から何か来る……！）

海音が状況把握とともに危険を察知した直後、3人の足下が切り裂けた

「一緒に逃げるぜお二人さん」

目と耳を保護していた130号は悶え苦しむ五徳と無抵抗の海音を担ぎ上げる

そのまま町へ入っていき、姿をくらました

「残念。まさか私の気配を察知して逃げきるとは。爆破屋の名は伊達じゃないわね」

木の上から3人に攻撃を放った女はクスクスと笑った

- - -

「ここまで逃げれば大丈夫だな」

130号は町の民家へ駆け込み、2人を降ろした

「な、何するんだ！俺たちを拉致して」

「五徳君、この人は敵じゃないよ」

「は？いや、何がなんだかさっぱりなんだが」

五徳は混乱した

家の中にいた中年の女性が130号に声をかけた

「なんだいその子たちは」

「さつき強烈な光と音が起こったろ？ライナのやつに襲われそうになったから救出してきたんだ」

「なあ、ガチで状況が理解できないんだが」

五徳が頭上に？マークを浮かべる

「あなたが味方だということは分かりました。事情を説明してもらえませんか？」

海音も同じく問う

「ああ。改めて130号だ。武器は各種爆発物の取り扱いで爆破系

の魔法を主に使う」

「私はこの宿の女将のドナだ。よろしくね坊や、お嬢ちゃん」

「俺は竜兎 五徳。五徳で大丈夫だ」

「海音ですー。今後ともご贔屓に」

若干一名がボケたが自己紹介は滞りなく終わった

「お前さんたち、疲れただろう。話は後ですから風呂にでも入ってきなさいな。オバサン、料理を作って待ってるよ」

「はあ」

「ありがとうございます。あの、宿泊代は」

「ああ、それなら俺が払ってやるから心配すんな。その代わりお前たちには手伝ってもらうことがあるがな」

一旦解散し、2人はあてがわれた部屋でくつろいだ

「話は後でって言ってたけどよ、あの人たちのこと本当に信じられるのか？」

「少なくとも敵ではないよ。今のところはね。一応確証が2つほどあるけど聞く？」

「ああ、願います」

お互い荷物を整理し、五徳は海音の話に耳を傾ける

「一つ目にさっきの目くらましと爆音だけど」

「ああ、あれはきつかった。PQVS子善の時といい熊公との死闘の時といい、強烈な光＆音の災難ばかりで嫌になっちまいよ」

「攻撃じゃなくて助けてくれたんだよ。別の敵の奇襲から」

「あの時、3人以外にも誰かいたのか？」

海音と130号はランクが高いので直撃を免れることが可能だったが、助けがなければ五徳の命はなかった

閃光と音は敵の標準を狂わせるのが目的らしい

「そういえば足下でザシュツとかいう音がしたな……」

五徳はゾゾーっと背筋を震わせる

「うん。もう一つはダイナマイトを取り出す瞬間フードの隙間からチラッとエンブレムが見えたの。多分わざと見せてくれたんだと思う」

「エンブレムって……なんの？」

海音はケースを漁りエンブレムを取り出した

表には5本の剣をモチーフにした紋章が描かれている

「対綾鶴財閥討伐戦線世界勇者連合軍のエンブレムだよ」

「そのアホみたいに長ったらしい名前は確か」

各国の軍や数々の組織、機関、そして5勇者をリーダーに据えた勇者サイド最大の連合軍だ

五徳は旅中に海音から説明と正式名称を聞いていた

「うん。略して勇者連合ね。このエンブレムは勇者連合に属している証で、幹部クラスや特定の人しか持てないの」

特殊な魔術的細工が施しており、連合に関係ない人は触れない

「スパイを炙り出す便利な代物だよ」

「はあー、なんたら勇者連合もいろいろ考えて対策とかしてんだな」

「いずれにせよ130号って人のほうがあたしより強いから、2人揃って逃げ出すのは難しいよ」

「つまり様子見ってことか」

五徳は一応納得した

グ

「やべっ、頭使ったらお腹すいた」

「じゃ、お風呂入って食事によっ。あまり手持ちのお金なかったから宿代浮いてラッキー」

「その代わり何かやらされるけど……あれ？そっいえば部屋って相部屋か？って、おい待てよ」

鼻歌を口ずさみ軽やかなステップで駆けていく海音を五徳は苦笑しながら追いかける

ひとまず波乱万丈な戦いを忘れて、たまの休暇を楽しむことにした

そんな中でも絶望はカイマの町を徐々に浸食していった

16話 襲撃者（後書き）

しばらくカイマの町編が続くと思います

17話 さよならタイタニック飯面

五徳たちは風呂から上がると受付のある広間で夕飯をとることにした

2人の他に数人の客が食事中だ

ドナが料理を配膳し、五徳と海音は130号の座る席に腰を降ろす

「やつ、お二人さん。風呂は混浴か？」

「ぶつ、そんなわけないだろ」

水を吹き出しかけた五徳がむせながら反論する

そこそこ大きい宿らしく男湯、女湯の他に混浴場がある

「冗談冗談。単刀直入に言おう。明朝カイマの領主宅を襲撃する」

「マジで唐突だなおい」

「ただの水……ジュース飲みたかったな、しょんぼり。でもこのポテトサラダはおいしいな。魚ばかりだったから羊肉は新鮮」

パクパクと旅中には自重していた食欲全開な海音だった

「時間がないんだ。もしお前が来なければ俺一人で行くつもりだったが」

「一人でも勝算はあるっつーことか」

「本気を出せばな。ただ、できるだけ本気を出したくなくてなそう
ならずじ済みそうで助かったぜ正直」

時計を見ると針は3時を指している

「本気を出したら何かまずいのか？」

「130号が131号になるぐらいまずい」

「……」

そういえばそんな名前だったけど五徳は電波を見る目を久々に繰り出した

「領主って綾鶴が関係してるんですか？関係してたら襲撃はまずい
と思いますよー」

「ふ、小娘よ心配すんなって、大丈夫だからよ。確かに綾鶴が関わ
ってるっちゃあ関わってるが」

130号はカイマの町に起こるとしという危機を話し出す
領主は現在綾鶴の人間に支配下に置かれている

「綾鶴グループはいろんな人体実験をやっている。毎週人が攫わ
れてる」

「なんつー組織だ綾鶴。無茶苦茶だ」

「ああ、んで近々綾鶴でたくさんのモルモットが必要らしくてな」

「カイマの町人を丸ごと持っていくってことですね」

「ああ。攫うというよりか綾鶴に完全に征服され奴隷と化すな」

五徳も海音も食事を終えた

「敵の戦力はどれくらいですか？」

「Bが1人、Cが3人、D以下が数人と領主の兵が10数人つてとこだ。こっちは俺たち以外に仲間が数人だ」

「奇襲するみたいですし、被害は少なくて済みそうですね」

この2人Bランクで敵はB以上が1人

130号の話だと作戦には領主の兵をこちら取り込むとか仲間も他にいるらしく、そんなに厳しい戦いではないかなと五徳はホッとする

「とりあえず昼間は安全だから買い物でもしてくるといい。暗くなる前には戻れよ、攫われっから」

「はい」

「あ、ああ」

魔具や日用品、携帯食料など買わなければならないものは割とある
2人は玄関をくぐって買い出しに出た

「今回はこの呪いに頼らず済むかもな……」

「130！速報だよ」

「ドナ……号をつけてくれって何回言えば分かった。で、どうした？」

いつもはおおらかなドナが顔を真っ青にしている
130号はただ事ではないと確信した

「今日敵側にAランクが1人来るって伝えがあったよ」

- - -

五徳たちを襲撃した綾鶴のBクラスの戦闘員、ライナはテレパシ
ーで男と念話をしていた

「綾鶴も、もつとマシなAクラスを送ってくればいいものを……な
んでただのタイタニックオタクが来るのかしら」

「はっはっは、それはひどい言いようだなお前」

「相手はやっかいな爆破屋よ。Aだからといって油断は禁物だわ」

この俺様、『戦船恐々（ダイナミックタイタニック）』のタイタニ
ック仮面が来るからにはタイタニック号に乗った気分でいてくれ」

（ああもつ、何言ってるかよく分からないわ。ほんと、うるさい男
よねえ……）

「ところでカイマ付近の川を船で逆走してるって聞いたけど、いつ頃着く予定かしら？」

ライナはとことんとある豪華客船映画の超絶オタの移動方法に呆れていた

なるべく水の上を小型ボート（タイタニック号を模してる）で移動し、陸地はタイタニック号を模した車を使う

「夕方までにはつくさ。……む？目の前に大きな岩が！？これは回避不能だ！」

「ちょ、どうしたの！？ねえ！？」

――

「俺様は今破損したミニタイタニック号と共に川に美しく沈みゆく……」

それがタイタニック仮面とライナとの最後の念話だった

タイタニック仮面はラジオでタイタニック号のテーマを流しながら恍惚とした表情で……もがいていた

「ああ、やはり最高のシチュエーションといえば沈没だよな。これだから沈没は止められない。……ってか、え？深くね？この川」

そつえば俺様泳げないこと忘れてたぜと自重気味に笑いながらゴボゴボと男は沈んでいった

男は戦船恐々という通り名の他に自滅屋、沈没船、出オチニック
という通り名があるとかないとか

17話 さよならタイタニック仮面（後書き）

残念ながらタイタニック仮面は自滅しました

18話 加工屋

「風車とか初めて見るな俺」

五徳と海音は魔具や武器、携帯食料などの買い出しに町に繰り出していた

日が出てるうちは実験体として攫われるという危険性はないらしい町は西洋の町を思わせる風貌で、ところどころに田畑がある
緩い丘や風通しのいいところに風車が点々と建っているのかな
風景を醸し出しているのが印象的だ
市街地に入るまではそんな田舎風景が続いていた

「まず五徳君の魔具買おっか」

「ああ。何だかんだで名残惜しいな」

五徳は折れた竿の代わりにテディベアを使っていた

「テディベア可愛いと思うのになー。ま、五徳君の使う得意な魔法特性考えたらちよつと心許ないよね」

「どうせ逃げることしか脳がないですよ。買うならやっぱり防御重視の魔具か」

「だねー。攻撃が手薄だから攻撃重視っていうのも一応選択肢に入るよ」

市街地はガヤガヤと人々の喧騒で賑わう

田舎町でも昼時はそれなりに人の出入りがある

2人は店に入ると魔具を物色した

「本とか剣とかいろいろあるな。少なくともテディベアや魚が刺さった包丁みたいな変なのはないか」

「普通の魔具店だからね。特異なものを扱ってる店も他にあるよ」

「うーん、剣は重そうだから……本は読む気になれんし……お？」

五徳は盾の魔具を手を取った

「かさばるし重いかさすがに」

「直接防御にも使えるしいいんじゃない？」

「でも持ち歩くのは大変そうだな」

「それなら召喚加工すればいいと思うよ」

「召喚加工？」

魔具や武器に魔術的な加工を施すことで、召喚加工をすると普段は別次元に仕舞って好きな時に出現させることができる

「加工は強力な武器や複雑な魔具ほど難しいけどこれくらいなら簡単にできるかな。ただ召喚する時や仕舞う時に少しだけ魔力消費するから気をつけて」

「ふーん、じゃあそれお願いするわ」

2人は店員から、ありがとうございましたとテンプレート化した挨拶を背に受け別の店へ向かった

「今から魔具の加工屋に行こう」

「え？自分ではできないのか」

「専門的な道具が必要だからね」

適当な会話を交わし、店に入る

「いらっしやい。今日何のご用ですかい」

気さくな40代前後のがたいのいいオジサンが出迎えた
海音は盾を取り出しテキパキと要望を告げる

「そついえば君たち、もしかして130号の知り合いか？」

「はあ、一応」

「おお！じゃあ君たちが明日の襲撃に加わる子たちか」

「オジサンもメンバーの1人なのですか？」

「まあな。わしはジェラークよろしくな」

海音の小さくて白い右手がゴツゴツと毛深い手に包まれ、握手する

「最近はずっとくても油断できんのが多いな。ま、明日は頑張ろうな」

3人は他愛のない話をし、加工屋を後にした

「……こちらジェラーク。2人を発見したぜいライナさんよ」

『ええ、分かったわ。あなたは2人の追跡をお願い。男のほうはただの雑魚だけれど少女のほうには気をつけて。私もすぐそちらに駆けつけるわ』

「了解。戦力は少しでも減らしておきたいからな。130号のやつ、わしがスパイだとは思えないだろうな」

ジェラークは電話を切ると店を閉じ、武器と防具を身につけた

- - -

その頃130号とドナは他のメンバーを宿に集めていた

「あの2人には悪いが敵のボスのライナを引きつけるための罠になつてもらふ。あのガキがBクラスだってのはジェラークによつてばれてるだろうから、向こうはライナが出るしかないだろう」

「まあ、海音ちゃんがいれば死ぬことはないと思うけどねえ、私はやっぱり心配だよ」

ドナは2人を罠にすることに反対していた

「ライナは厳しいとしてもジェラークぐらいは倒してもらいてえな」

「あのスパイCランクだし、ほんとに心配だわ」

「じゃ、ドナお前行くか？」

「私が抜けたらきついでしょう？なんたってAランクのタイタニック仮面とかゆうの出てくることだしねえ」

「ああ。お前たちはタイタニックなんとか以外を倒せ。俺がおふぎけ仮面を潰す」

130号の言葉に対し、ドナ以外は「ああ」やら「おう」と相槌を打った

ドナは険しい表情で130号を見た

「130号、一年も封印してきた呪いを使うのかい？また自分殺しを行うかもしれないのに？」

「ああ。この忌々しい呪いを全力で使わねーと無理だな。なんたつて腐ってもAだ。例えば131号やそれ以上になろうとも」

「はあ、仕方ないね。もうこれ以上は何も言わないよ」

ドナを納得させ一団は宿を散り散りに出た
その後時間をずらし領主の館の裏方に回った

- - -

「五徳君、ちょっと耳貸してもらえるかな？」

「え？あ、ああ」

2人は一通り買い物を終えた
五徳が屈むと海音は口を耳に寄せる

（うつ、中学生とはいえ美少女の顔を間近で見るのは初めてだ……）

赤くなる五徳をよそに海音はぼそぼそと囁いた

「あたしたち、つけられてる。さっきのジェラージュって男に」

「なんだって？味方じゃないのか」

「うん。加工した盾に細工はされてないから安心して。多分このままだと敵の仲間に合流される」

「じゃ、どうすんだ？」

「とりあえず、あの男を振り切ろう」

19話 実力差

ジェラーグは2人を尾行していた

（宿屋に戻らんのか？あいつら。こんな人気のない路地裏に入つて）

2人が路地裏の狭い通路を抜け、広場に出た

ジェラーグも見失まいと通路を抜けたが2人の姿は忽然と消えていた

「しまった逃げられた！」

ジェラーグは無線機を取り出し、ライナに連絡をする

「ライナさん、逃げられちゃった！……え？見つけた？了解、すぐそっちに向かう」

- - -

「ハアハア、ここまで逃げれば大丈夫だろ」

「そうだね。あの男の気配はもうないよ。ただ……」

海音は五徳を両手で思い切り突き飛ばした

「わっ！」

ゾンツとさっきまで五徳が立っていた場所に見えない斬撃が走った

「あらら、よけられたか。私は綾鶴のライナ。あなたたちを消しに来たわ」

「何のためにあたしたちを？」

「隠したって無駄よ。あなた、Bクラスの実力あるでしょ？」

海音は刀と杖を取り出し身構える

五徳も体勢を立て直し、盾を手にとった

「こっちは2人だよ、あなた1人であたしたちに勝てると思う？」

「くすくす、もうすぐジェラーグがやってくるわ。それに、この広場は領主の館の側。私に有利に働くよう、罠を仕掛けてあるわ」

ライナが両手を広げ、見えない斬撃を飛ばす

海音は刀で受け流した

「ぐっ、防護シールド全開」

五徳の盾が青白く光を放ち、全身をバリアが包む

しかし、斬撃にズタズタに切り裂かれ後方に吹き飛ばされた肩、腰、左腕に切り傷が浮かび上がる

「がああ！」

「五徳君逃げて！君を庇いながらじゃ闘えない！」

「あ、ああ」

五徳は立ち上がると側の林に逃げ込んだ

「ジェラーグ、林にネズミが逃げ込んだわ。追ってちょうだい」

ライナは無線機でジェラーグに詳しい場所を伝えた

- - -

「お前たちは……！襲撃は明日じゃなかったのか！？」

「やっぱ筒抜けみたいだね。今日突撃して正解だねえこりゃ」

ドナが呑気に呟きながら兵を気絶させる

130号たちは領主の館に乗り込んでいた

「お前たち、兵は殺すなよ。無理やり従わされてるだけだからな。
綾鶴のやつらは別だが」

130号とドナの他に戦闘をこなせる精鋭が15人
バックアップが10人いる

一団は館の中に入っていた

「さて、俺はなんちゃって仮面を探しに行くとすつか」

- - -

「くっそ、あのデカブツずっと追ってきやがる……！」

五徳は林の中を全力で逃げ回っていた
加速魔法を使用していたが向こうはCクラス
もう少して追いつかれてしまう

「ガッハツハ、ようやく追いついた。食らいな」

ジェラークは右肩に担ぐ魔装バズーカの引き金を引いた
強烈な爆撃が五徳に襲いかかった

「んなのアリかよ……！うおおおお」

横にダイブし、爆風に対して盾を掲げる
風属性の魔力を帯びた爆風は木をなぎ倒していく
盾に僅かにかすり、それだけで五徳は紙切れのように地面を飛び
跳ねた

「うつ……」

「お前さんに恨みはないが死んでくれ」

ジェラークはバズーカに魔力と弾を込め、五徳に向けて射出した
小さな竜巻が起こり、地面や木が決れる
五徳の身体は粉々に引き裂け宙を舞った

「……ダミーか」

粉々に裂けた物体を見ると人形だった

「わしを騙すとは、逃げるだけとはいえそこそこ魔法は使えるみた
いだな。だが」

バズーカに弾と風属性の魔法を再装填し、上に向けた

「お前さん程度じゃわしに奇襲は無駄だ」

「ぐっ……」

五徳は木に登りジェラッグに上から奇襲をかけていた
しかしバズーカを向けられたため、魔力を付加した盾を攻撃でな
く防御に回す

轟音とともに風塵が盾を包んだ

（実力差が大きすぎる……素直に逃げりゃよかった……）

五徳は盾に身を委ねながら後悔した

全力で魔力を注ぐが、虚しく弾き飛ばされ上空を舞う

（完全にバリアが壊れた……張り直す時間がない！それに）

真下から砲撃を受けたために五徳は落下せずにジェラッグの真上
に留まったままだ

（2撃目が来る！）

「そこなら身代わりはできまい。死ねい」

20話 かまいたち

130号たちは領主の館の制圧をあっけなく終えた

領主に話をつけ、近衛兵を味方に引き込んだ

Cクラスの綾鶴の戦闘員が1人とDクラスが数人いたが、Bクラス
の130号やドナによって倒された

「話に聞いていたAクラスの仮面男がいないねえ。私たちの半分以上は殲滅されることを覚悟してたのに」

ドナはうーむと呟いた

「言い忘れていたが、そのタイタニックマニアなら自滅したと聞いておるぞ」

綾鶴に支配されていた年老いたの領主が淡々と漏らす

「は？自滅？」

「そうじゃ。今は確か近くの川に沈んでいるらしく仲間が救出に向かっているらしい」

「救出されちゃあめんどうだな。俺たちもそこへ向かおう。領主よ、場所を教えろ」

- - -

「食らいなさい」

ライナが手をかざすと無数の斬撃が海音を襲った
杖で呪文を唱え、盾を作り出す

（あの人の技は十中八九風属性のかまいたち。ただ……）

音もなくかまいたちが盾を切り刻み貫通する
海音は切り刻まれた盾からかまいたちの軌道を予測した
刀で受け流しながら横っ飛びで避ける

（ただ、強力なステルス加工が施されてるのがやっかいだな。無色、
無音、動きも速さも不規則、魔力感知も不可）

「あらら、避けられたわ。これならどうかしら」

ライナは目標を定めると再び視認できない斬撃を飛ばす

「そんなの盾を出して軌道を予測すれば……」

「甘いわ」

斬撃は盾を四方八方に大きく迂回し、両翼から海音に襲いかかった
刀で片方は弾いたものの、もう片方が直撃する
魔術師の最終防壁である体全体を薄い膜で包んだバリアを破った
服がところどころ裂け、小さな切り傷を刻まれる

「うっ……」

「うふふ、その綺麗な顔をズタズタにしてあげるわ」

ライナは両手で何かを掴むような構えを取った

「構え太刀：空の舞い」

見えない太刀を海音目掛けて振り下ろす

間一髪で避けるとすぐ側の地面が切り刻まれる

太刀はそのまま横へ振り抜かれる

海音はライナの両手と地面の傷跡から軌を予測し、刀で防ぐ

「本当に甘いわね、あなた」

海音自身と周囲で死に神の風が狂喜乱舞する

「ううっ」

「太刀とカマで同時に攻めてあげる」

猛攻は確実に少女のバリアを、服を、肌を引き裂く

斬撃をギリギリでいなしながら左手の杖の底で地面を叩きつけた

「フラッシュ！」

ライナの視界が一瞬、白一色で染まる

光が消えると海音はその場にいなかった

「こしゃくなマネを……」

ライナは光抵抗魔術を自身に纏う
直後背後から声が聞こえた

「なっ、いつの間に!？」

「凍りつけ!冷光石火」

かまいたちで反撃される前に電光石火の如くライナとすれ違った
高速移動で通った道、すれ違ったモノを凍らせる技だ
同時にすれ違いざまに右手の刀で斬りつけた

ライナの身边を常を守る自動迎撃の斬撃ひ阻まれ、金属同士が叩
き合う高い音が鳴った

ライナは氷に包まれていたが、すぐに粉々に刻み脱出した

「やってくれるじゃない……本気で死にたいみたいね」

ライナの眼光が鋭くなった

（最大級の最高速の鎌を受けて真つ二つになりなさい!）

「無太刀：断竜頭台の舞い」

そもそもライナの繰り出すかまいたちはノーモーションで可能だ
さっきまで構えていたのは一撃で海音を葬り去るための布石に過
ぎなかった

自身と同じBクラスを倒すには出し抜くしかない
海音の頭上に強大な凶刃が音もなく迫った

（少女は微塵も気づいてない様子。勝った……!）

そして、海音もろともライナの目の前が木っ端微塵になった

21話 対ジェラーゲ

「勝負あつたわね」

ライナは静かに勝ちを確信していた
同じランクでも強弱の差が大きいこともある

ブブブブ

「あら、無線が」

ライナは無線に出ると館が制圧されたことを知った

「なんですって！？今すぐそっちに向かうわ」

-
-
-

「ふう」

海音はライナが立ち去るのを陰から見ていた

「早く五徳君を助けに行かなくちゃ」

海音は林に足を向けた

（ステルス機能がついているといっても、コントロールしている術者だけは感知できるからね。心を覗けば楽勝ですよっと）

- - -

「吹き飛ばへ」

ジェラークの持つバズーカが火を吹き、弾は垂直に真上を目指す線上には身動きの取れない五徳がいる

（今度こそ死んだか……？）

何度目か分からない死を覚悟した五徳だったが、弾はスレスレを通り過ぎて外れた

「なっ、馬鹿な！？この距離で外すなどありえん！」

「うおお！」

五徳は落下の加速を利用し、盾をジェラークにつきつけた
ジェラークはバズーカの砲身で受け流す
地面に着地した五徳は加速魔法で一気に距離を取った

「盾には特に小細工はしてないみたいだな」

「商売において信用は命だ。ましてや、変に弄くるとあの少女に見破られるだろ」

ジェラーグはガハハとごつい笑い声をあげる
お互いに距離を取って向かい合う

「なんであんたら綾鶴は平気で人体実験するんだ？」

「さあな。そんなものは金全様きんぜんに聞かないと分らん。どのみちお前さんはかこで死ぬ」

「金全……？そいつが綾鶴のボスなのか？」

五徳の問いを無視し、ジェラーグは弾を込める
バズー力を肩に載せ片膝を地につけた

(……？今までしなかったのにここで姿勢を固定した？)

五徳は盾と足に魔力をこめ逃げと防御の準備を整える
先に動けば移動先を予測され打ち抜かれる
攻撃を待っても爆風には耐えられない
砲撃を盾で受け流すようにガードしながら避けるしか五徳が直撃を逃れる方法がない

(多少のダメージは覚悟のうえだ。あいつのバズー力は毎回弾と魔力をリロードしないと撃てない。そのスキに逃げる算段を立てる)

「普通の砲撃じゃあなかなか捉えられないからな。掃射させてもらう」

瞬間、辺り一帯が殺戮の光に埋もれた

22話 逃げの攻め

「……」

激しい砲撃の中、五徳は身を伏せていた
下以外の270度全方位を線を隙間なく無数に束ねた緑光が流れていく

熱を感じないのはその光が熱線ではなく風による刃だからだろう

（まただ。さっきの砲撃と同様、攻撃が俺を避けてる）

掃射が終わり煙がモクモクと立ち込める

ジェラーグは煙が晴れるまでの間に次弾を装填した

「並のやつじゃあ避けられも防げもしない。跡形もなく消え去ったな」

ジェラーグは気を緩めることなく土煙を見つめていた

先程真上への砲撃を外したのが偶然ではないかもしれない

その懸念が普段は大ざっぱな彼の神経を鋭くしていた

（さて、ここからどうする……？）

十数秒も経てば視界を塞ぐ煙は晴れる

五徳がジェラーグの姿を視認したと同時に更なる砲火を浴びるだろう

（この謎の力は意識して出せない。発動にムラがあつて不安定だから頼れないな）

五徳は盾を握りしめ熟考するが良案は彼を嘲笑つかのように姿を見せない

逃げるにはあの掃射の雨をかくぐらなければ不可能

助けは期待できない

謎の力が再び発動するかは分からない

命乞いは無駄

盾と手持ちの魔法では防ぎきれないし、何よりすでに魔力がほとんどない

（考える考える考える。俺はあの脱兎の五徳だぞ？ここで逃げねえでいつ逃げるってんだ）

煙に紛れて移動する

音を立てずに？

周りは砲火の雨で隠れる場所も何もないのに？

五徳の頭の中を無理という言葉が埋め尽くす

何も思いつかないのなら消去法で一番マシなものを選ぶしかない
勝ち目がなくとも1分1秒でも延命すれば救援やチャンスが訪れるかもしれない

後退はダメ、横への移動もダメ、助けもない、話が通じる相手じゃない、魔法を全力で使用しても防ぎきれない

（なら、これしか残らないか）

半ば諦観しながらも逃げ道を探す五徳はやケクソで藁にもすがる

思いだ

（盾に攻撃系の魔法を仕込み、オッサンに突撃する。攻撃は最大の防御ってかな）

バズーカ砲は爆風で自身が巻き込まれる恐れがあるので近接戦には向いていない

さらに銃身が大きく重たいため狙いも定まりにくい

例え魔術で補強していようが同じ接近戦ならまだ盾のほうが有利だ
五徳は口元を歪ませ前方の粉塵を睨みつけた

（そもそもこの作戦とも言えない作戦も逃げの一手でしかない）

砲撃は一撃で致命傷だが接近戦での蹴りや打撃は数発耐えられる
もとより接近戦においても勝ち目はない

（ヒット＆アウェイだ。防御に専念して攻撃する）

煙が晴れる寸前、五徳は加速魔法を発動し、ロケットの如く前傾
姿勢で飛び出した

（俺に勇氣はない。ただ冷静に最善策を練っただけだ。危険な状況
なのに冷静でいられる……俺は特別なのかもな。いや、異常なのか）

- - -

「館を出よう」

130号は仲間と兵に声をかけた

「仮面男を探しに行くんだね」

ドナはフライパンとオタマを背中の中のショルダーに刺した
ふざけているように思えるが、れっきとした彼女の武器である

「ああ。放っておけば町に来やがる。攻められるよか攻めるほうが
いい」

一団が館の外に出ると1人の女が無機質な瞳で130号を射抜いた

「私がない間に随分とやんちゃを働いたみたいだね。お仕置きが
必要ね、爆破屋さん」

「ライナか。あの少女はどうした？」

「あの子なら切り刻んであげたわ。……逃がさないわよ」

場に緊張が走る

ドナがフライパンを背から抜こうとしたのを130号が手で遮った

「俺がこの女とやる。実力的にお前らじゃ厳しいし、俺とこいつに
は因縁がある」

「分かったよ。じゃ、私たちは川へ急ぐとしますかね」

ライナの横を通り過ぎようとしたドナにかまいたたちが遅いかかった

「行かせないわよ!」

「お前の相手は俺だ」

ライナ目掛けて黒い鞭が迫った

鞭に数発の斬撃を当てて勢いを殺すが、切ったところから爆発が巻き起こった

「バーンウィップ!？」

爆風を自動迎撃で切り裂き、受け流す

ライナの視界が塞がれる間に一団は側を駆け抜けていった

「その程度じゃ、鞭は切れねーよ。さて、同ランク同士の戦い……殺し合いだな」

23話 穏やかな逆鱗

ジェラーグの眼前に突如五徳が現れた

「砲身を向けるが距離が近すぎるため狙いが定まらない

「自暴自棄に走ったか小僧……！」

五徳が盾を片手で横に持ちジェラーグに向けて右から左へ振り回した

（盾に爆破術式を仕込んだ。やつの体に当ててぶっ飛ばしてやる）

「調子に乗るな小僧」

バズーカな砲身によって盾が受け止められた

「押し合いならわしの力＋バズーカ砲の重さでわしの方に圧倒的利がある」

ジェラーグはバズーカを下からかち上げるように大きく突き出した
五徳は耐えきれずに後退し、尻餅をつく

「グッバイ小僧」

禍々しい大穴が獲物を捉えた

ジェラーグは躊躇なくブレることなく引き金を引いた

近距離なため自身にも爆風の被害が及ぶが、このチャンスを逃す

手はない

「ちっ」

五徳は咄嗟に盾を横に構えた

砲撃が襲い来る直前、盾の爆破術式を発動した

反動と爆風で転がりながら移動し、砲撃を逃れる

「ぐぬっ」

ジェラーグは爆風のダメージを受けしかめっ面をした

（回避に使っちゃった。また術式を仕込まねえと……！）

だが新たに術式を紡ぐ猶予はない

五徳は立ち上がり、ジェラーグが弾を装填するまでのタイムラグで一気に詰め寄った

再び盾と砲身がかち合う

（直進しても力で押し負ける。ヒット＆アウェイを忘れるな俺）

砲身に突き飛ばされる前に五徳は横っ飛びに避けた

僅かにスキのできたジェラーグの横っ腹に蹴りを入れる

「そんなへなちょこキック、効かんよ」

（げっ、堅えこいつ）

野太い腕によって五徳は顔面に拳をもらった

ここで距離が離れた一環の終わりだ

五徳は無我夢中で腕にしがみついた

「……」

鼻血を流しながらぼやける思考で五徳は考えた

（殴られた衝撃と魔法でこいつ投げ飛ばせないかな）

「加速魔法、怪力魔法発動」

両足と両腕に力をこめ、いつか学校で習った柔道の背負い投げを
思い出す

うる覚えで形も変だが無理やり投げ飛ばした
ズンツと鈍く響きジェラーグは宙に浮き、地面に叩き伏せた

「ぐあっ」

（……さてここからどうしよう）

これで魔力を使い切ってしまった

素手や盾で攻撃しようにもダメージは微々たるものだ

すぐに態勢を立て直され、砲撃を食らいジ・エンドが関の山だ
もちろん逃げるといふ選択肢は絶望的

五徳は度重なるダメージと魔力が切れた反動で頭の中がぼやけて
いた

（……あれ？俺、何してたんだっけ。ああ、今身の危険が迫ってる
んだっとな）

揺らぐ視界の中、走馬灯のように過去の奥の奥底深くに封印され

た記憶が呼び覚まされる

（確か昔、少女に頭の中をかき回されそうになったことあったっけ）

それはいつの頃かも分からない記憶

両膝について鎖に繋がれる五徳の頭を少女は両腕で包み込む

人形のような可愛らしい顔が間近に迫った

少女の目は凍てつくような美しい水色で口元は静かな笑みを浮かべていた

『あなた、……われた……じゃ……調……ね』

もやとノイズではつきりと思い出せない

ただ、このまま少女が頭の中に蹂躪される

その一点だけは分かった

（あの時どうしたんだっけ、俺）

両腕両足は鎖に繋がれ身動きが取れない

拷問によって飢えと精神的ダメージがひどかったため、ほとんど

意識は飛んでいた

幼い思考はぼんやりと考えていた

（そうだ、あの時何をされるかよく分からなくて。でも痛いのが苦しいのはもう嫌だと強く……強く拒絶したんだっけ）

心の中に少女がいた

その少女は冷たい笑みを浮かべ五徳の心を支配しようとした

誰もが逃れることのできない少女の闇の手

それを……

（拒絶……ねじ曲げたんだ）

『……！？……んで？あた………一体………』

これ以上は思い出せない

五徳は静かに起き上がるうとするジェラーグの側に歩みよった

「物理的なものだけでなく……精神面にも効果は及ぶはず」

五徳自身、自分が何を言っているのかさっぱりだった

脳がぼーっとしてまるで夢を見ているかのようなまどろみを感じ、
どこか心地よい

両の掌で静かにジェラーグの頭を包み込んだ

「痛いのは嫌だ。苦しいのも嫌だ。全部、ねじ曲がれ」

男の低く野太い絶叫が生い茂る木々を揺らした

数秒後、さつきまで林に響いていた破裂音や叫び声は消え、辺りを静寂が支配した

24話 呪人族

五徳はしばらくぼーっとつつ立っていたが、次第に意識が戻りハッとして帰った

「頭いてえ……何がどうなったんだか」

足下を見ると口から泡を吹き白目をむいているジェラークが横たわっていた

「え？倒したのか？」

記憶はひどく曖昧でぼんやりとしか思い出せない

五徳は満身創痍の体を休めるため側……の木は倒れていたの少し離れた木の根元に身を預けて座った

（夢を見ていた気がする。どんな夢だったかは詳しく思い出せないけど、なんていうか……悲しい――哀しい夢だった）

五徳は心身共にひどく疲れていた

特に精神が参っていて怖い夢を見た時に流す冷や汗が溢れていた

「五徳君大丈夫？」

海音がひょっこりと現れた

「海……音か。倒したぜこいつ」

「え？Cクラスの男を！？」

彼女はジェラーグの側に寄り状態を確かめる

（……外傷は特に見当たらない。精神的な関与があった？五徳君がそれを起こした？）

「ごめんね五徳君。あの女の人から逃れたものの罠が仕掛けてあつて。避けたり解除するのに手間取っちゃった」

「そうだったのか……とりあえず、寝かせてくれ」

薄れゆく意識の中で五徳は漠然と考えていた

（……マントマンと行動を共にした時、あの熊の時、そして今回も海音は戦いが終わっあ後、ちょうどよく駆けつけてくるよな……）

毎回戦闘終了直後に現れる

ただの偶然か

偶然じゃないとすれば何のために

（まあ、いいか）

そこで五徳は気絶するように眠った

- - -

「ハア、ハア、やっぱめんどくせえな」

130号は息を荒げ苦戦していた

爆破の鞭はすでにズタズタに引き裂かれ地面に転がっている

ライナは涼しい顔で130号が起こした爆風を切り刻み、後方を受け流した

「どうやら同じクラスでも実力差があるようね爆破屋さん」

「否定はしねえぜ。だが、実力〓勝利に直接は結びつかねーよ」

130号は煙幕弾を地に叩きつけライナの側面に迫った

（爆ぜろ。爆撃砲）

130号は右腕の袖の下から卒業証書入れ程度の大きさの筒を覗かせる

筒から爆炎が轟きライナに猛獣の如き迫り包み込む

「無駄よ」

自動反撃によって初撃を逸らす

瞬時に攻撃された方向を導き出しそこに3対の縦の斬撃を放った
爆炎を押し戻し自らの力として巻き込む

（粘着性のかまいたちか。厄介なもん使いやがって）

粘着性を持つ魔法は衝突した魔法を巻き込み自らの糧とする
無論、相手の術に押し負け場合逆に相手の術を強化して襲いかか

つてくる両刃の剣的な魔法である

「ボムジェット」

130号は小型爆弾を爆破し、爆風で加速した
炎撃を避け、ライナに照準をあわせる

「爆翼挟撃」

燃え盛る爆炎の翼が双方からライナへ襲いかかる

「構え太刀：裏切りの旋風」

ライナは目にも止まらぬ速さで回転した
両手の見えない太刀を回し翼を叩き斬る
炎は霧散せずに見えない太刀に纏わりつき炎剣を生み出した

「また粘着魔法かよ。粘着質な女だよなほんと」

「あらあ、あなたに言われたくないわよ。さつさと死んでくれれば
追いかけて回さなくて済むのだから。呪人族の生き残りさん」

「……気づいてたのか。なぜ上に報告しない」

「うふふ、そんなことしたら他のエージェントが派遣されるじゃない。
い。そしたら私が捕まえて手柄を得られなくなるわ」

130号は眉間に皺を寄せ低い声で怒りを露わにする

「……俺たちは呪人族じゃない」

「あは、そういえば呪人狩りの時みんなして憤慨してたわねえ。呪われてる民を呪人と言って何が悪いのかしら」

「……」

130号は無言で死闘を再開した
爆弾、爆破魔術、爆破武器を駆使しライナと渡り合う
しかしライナの方が上手でとうとう地に叩き伏せられた

「なんで呪いを使わないのかは分からないけどとりあえず両手両足を切断させてもらっわね」

「……ぐっ」

130号は束縛術式で地面に拘束されていた
仰向けになった130号に4発の見えないかまいたちが降り注ぐ
拘束を抜け出すには一瞬遅い

「両手足にグッバーイ」

肉と骨が重い音をあげ、無情にも130号の腕と足は切断された

25話 爆炎の中の決着

「ぐ、っがああああっ！」

仰向けの130号の両腕両足にかまいたちが降り注いだ
結界を展開するがあっさり破壊され、見えない刃が肉と骨に食い
込む

ぶちっ……という肉を抉る音とごりっ……という骨を建つ音が館
の玄関前で同時に木霊した

「案外対したことなかったわね爆破屋さん」

ライナも無傷ではない

実力の上下があってもそこは同ランク同士
多かれ少なかれライナもダメージを受けていた

（ちよっと手こずったけど、まだ戦えるわ。この男を監禁して、あ
のフライパンおばさん達を追いかけないと）

「……おい、ライナ。ハアハア、確かにお前の方が上手だった」

「あらそう。あなたは今まで散々逃げ回っていたけど実際はこんな
ものよねえ。あっ、いけない早く止血しないと死んじゃうわね」

ライナが顎に手をあて、くつくつと笑う

130号は激痛に眉を寄せながらライナを睨みつける

「……俺がただ黙ってやられたとでも思ってたのか？そうだとしたらてめえはよっぽどの楽道家だ」

「……なに言って……！」

カチッ

130号のフードがはだけ、破れた服の穴から無機質な……何かの機械塊が見えた

「普段はどんな衝撃を受けても……例え破壊されても起爆しない。だが」

130号は一度息を整え

「特殊な魔力を送ることで俺の腹に埋め込まれた爆弾は起動する。生命エネルギー、魔力、科学を全て織り交ぜた自爆だ。生半可な威力じゃねえぜ」

「……ちっ！」

ライナは距離を取ろうと体を後ろへ向け走りだそうとした

「これは……結界！？それも強固な」

130号とライナはドーム状の透明な結界に覆われていた
ライナがかまいたちでそれを破壊しようとしたが時すでに遅し

「これを準備したためにこんなザマだ。相打ちぐらいには持つていつてやるよ」

轟音が轟き燃えたぎる光が弾けた
透過性の結界にひびが入る様はまるで景色が割れているみたいで
ミステリアスな光景だ

地は鳴動し、橙色に焼け付き、煙をあげる

結界は衝撃を押さえ込めず、爆風が外へ漏れ出した

館は街から離れているが鋭い光と地を揺るがす轟音、鼻をつく焦
げ臭い臭いに町民は異常に気がづいた

館の方を見ても炎が荒れ狂いどうなっているのか分からない
おそらく天を黒煙色で塗りつぶしている真下は焼け野原となっ
て
いるだろう

「うつ……はあはあ」

ライナは爆炎の中、土に埋もれていた

土を切り裂き身体を炎吹き荒れる危険地帯に晒す

なんとか火が回っていない地に這い出る

周りには業火が広がっている

直に町民が駆けつけ消化活動が始まるはずだ

「うつ……足に力が入らないわ」

ライナは膝から崩れ落ちた

球状の小さなバリアに実を包み、黒煙……一酸化炭素などの有害
なガスや熱風をシャットアウトしているが長くは持たない

「やつは……死んだわよね体弾けてたし。かまいたちで道を切り開
いて抜け出すしかないわね」

自動防御として組み込んだ迎撃空刃で体を保護したが、術式が壊れてしまうほどのダメージを受けた

咄嗟に地面をかまいたちで挟り出し、土を盾として威力を半減したものの前述の通り土に埋もれ、あちこちを打撲した

（うぐっ……立てない……何本か骨が折れてるわね。出血もあるわ）

それでもバリアが切れたら死を迎え入れてしまうので全身に鞭打ち、匍匐前進で前へ進む

体勢は低いため視界を黒煙で覆われることはないが、変わりに橙色の悪魔が視界を隠した

そもそもこの炎の海の中、前も後ろもない

（あまりかまいたちを使うとバリアが解けちゃうけど仕方ないわね）

かまいたちを繰り出し視界を広げる

目の前に……人がいた

炎の中フードを着て熱風をそよ風のごとく浴びているかのような涼しげな顔の男……130号がライナを見下ろしていた

「なっ……あなた、死んだはずじゃ」

百本譲って生きていたとしてもおかしい点があった

無傷だ

五体満足で、それどころかフードにさえこの戦いで負った傷がない

「ああ、確かに俺――正確には違うが――死んだ。お前を確実に追いつめるには自爆しかなかったからな。忌々しい呪いを使うことに

なっちまった」

「呪人族……呪われた、民。あなた、指名手配されている……」

「ウエルダーだ。自分殺しの、な」

130号もといウエルダーはトドメを刺すためにライナを見据え、狙いを定める

彼女は負傷しているため外しようがないが

「呪われているのは俺1人だ。呪人族じゃなく祝福の民と言え。ま
- - お前はここで終わりだが」

ウエルダーの右手から殺意の塊が投げ放たれた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2520p/>

俺と伝説と操る者達

2011年1月1日00時55分発行